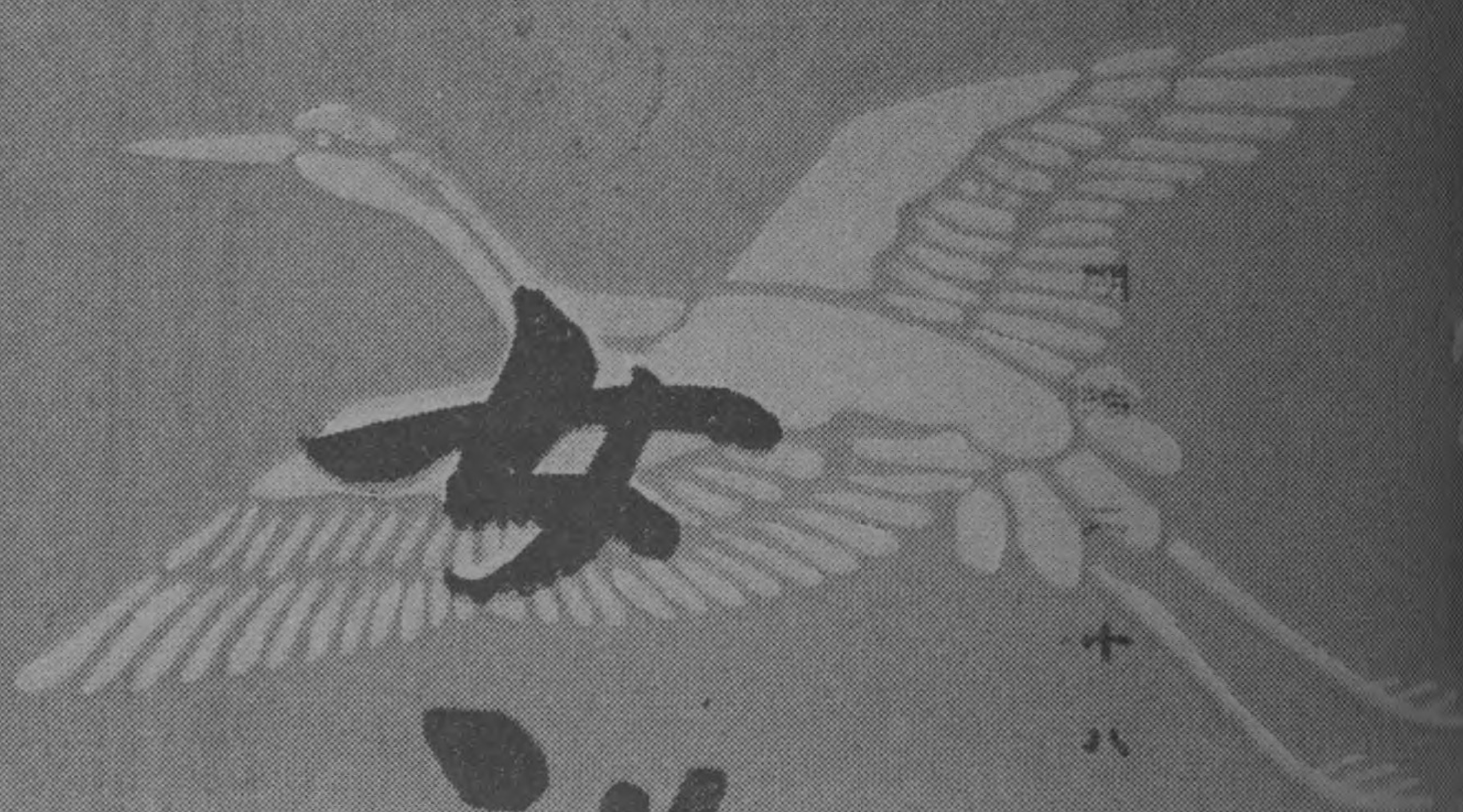


女鑑

明治二十八年十二月五日發行

第九十九號

東京國光社

女鑑第九拾九號

目録

かほよ



女鑑 第九十九號

國家に對する婦人の事業(つゞき)

前の號にて、ほゞ、單獨の生活、および、公共の生活を說きたれば、本號にて、さらに、國家的生活、事業、精神、冀望等を述べんと欲す。そは、文明の進步し、國勢の變動するとともに、人の智識の範圍も、運動の區域も、自然に廣くなり、高くなり、大きくなるべければなり。賢良なる我が姉妹諸孃は、單獨的の思想、事業の今日に、無益なることを認めらるゝならん。しかして、公共的思想、事業の、大に有用なることを識らるゝならん。然り。まことに、わが姉妹諸孃は、世間萬事に就きて、公共的觀察を要するなり。則ち、己一身、もしくは、其の家族の外にも、出來得るだけ、利益を與へ、幸福を增し、心を一にし、力を協せんことを要するなり。これ、人間世界は、決して、一人、一家のものにあらずして、相互に、利害休戚を交換するに由ればなり。

しからば、國家的生活、事業、精神、冀望とは、如何なる事をさして言ふか。曰はく、

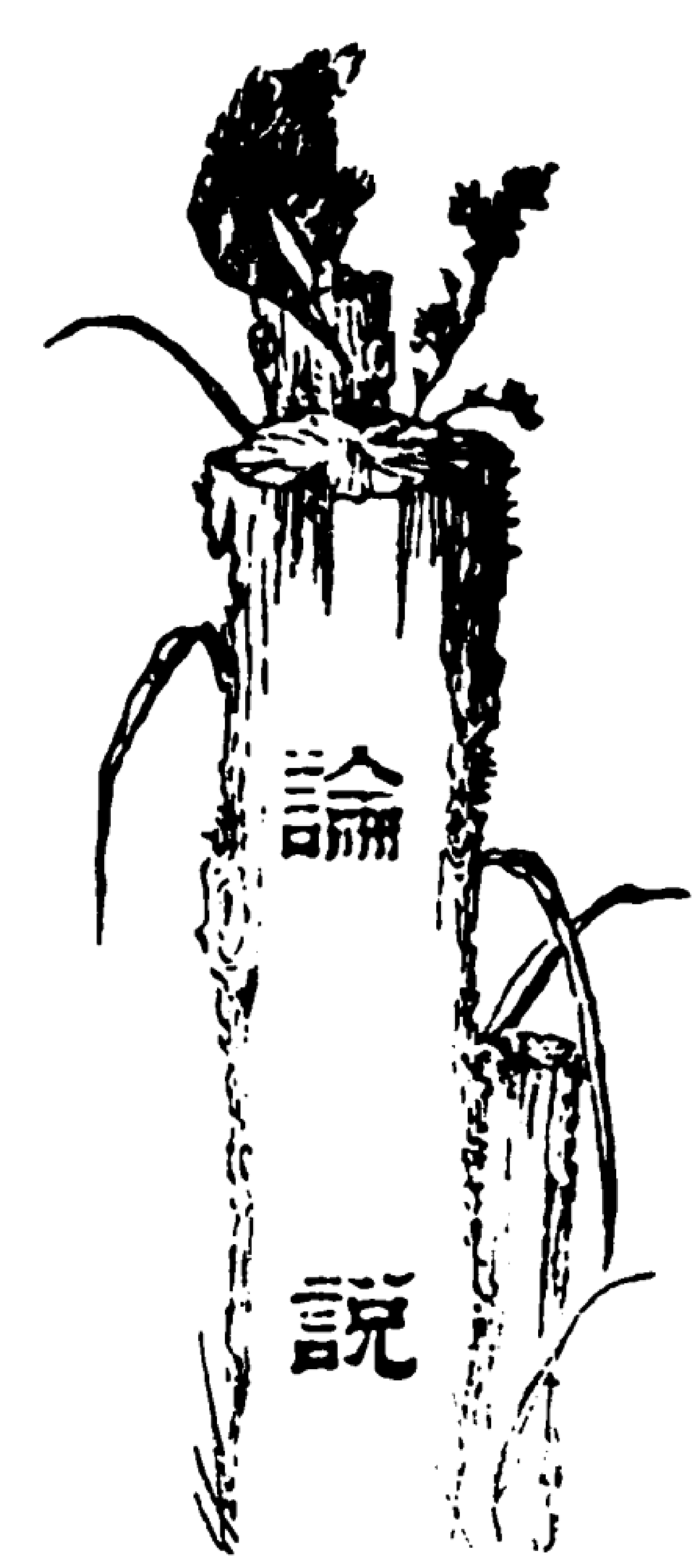
他なし。婦人も、國民として、國家に對する任務は、いさゝかも、男子と異ることなし、故に、男子が、國家のために勉むる事柄には、女子も成るべく、力を盡し、意を注ぎて奮はざるべからず。天然の性質、能力の違ふ點は、止むことを得ずといへども、國民として爲すべき事業中の、婦人に屬するものは、自進みて、これに當らんことを望むなり。されば、婦人の負擔すべき國家の事務とて、別に法律に定むるにもあらず、他の命令に賴るにもあらざれば、自身の事業は、自身にて、これを發明し、敢て、人に依附すべからざるなり。そもそも、今日、婦人の、力を盡し、意を注ぐべき國家事業は、果して、何なるか。今日の國家事業中、姉妹諸孃が、最まづ、力をつくし、意をそゝがざるべからざるものは、果して、何なるか。

顧ふに、戰後、わが姉妹諸孃が擔任すべき國家事業は、こまかに、これを別ては、乃、衞生となり、敎育となり、慈善となり、種々復雜なる個條となるべしといへども、吾人は、此等の外に、一個の冀望を屬するものあり。この冀望は、よく、實際に行るべしや否や、未明ならずといへども、賢良なる姉妹諸孃は、必、吾人と、その志望を同じくせらるゝならんと信ず。されば、一個の冀望とは、何事ぞ。いは

く、帝國の新領地──臺灣──に於ける移住、教育、衛生、産業等に向ひて、大にわが婦人社會の奮勵を計ること、是なり。いま、忠勇なる陸海軍人の力によりて、首尾よく、鎭定はなしたり。されども、戰後の臺灣を經營し、拓植し、國化して、完美堅固なる屬島となし、大日本帝國の一部分たるにはぢざるまでませんには、猶、五年、もしくは、十年、もしくは、二十年を費さゞるべからず。かゝる大事業、豈、ひとり男子のみにて、これを成就すべけんや。

臺灣を拓植して、富强なる新日本國となさんせとば、將來、是非とも、男女の共住を謀らざるべからず。一時營利の目的なれば、少數の男子にて、可なり。前途興國の根本を定めんには、男女共住を以て、その第一策とす。臺灣を、本土と、區別なからしめ、充分なる國家の機關をとゝのへ、往來交通を、頻繁ならし、帝國の南門とせんには、今よりして、大に、移住渡航をすゝめ、國民をして、永住の長計を立てしめんのみ。しかして、永住の長計の、その第一着は、男女、相提携し、相補助し、以て專、拓植の策を講ずるとともに、教育、生活、衛生等の日用庶務に、缺陷なきを期せざるべからず。これ、吾人が、この際、わが賢良なる姉妹諸孃の一部が、决然

南航の氣を鼓せんことを要むる所なり。加ふるに、臺灣の地たる、これを、北海道に比すれば、その生計營業は、はなはだ、安穩なるをや。來春にいたらば、平定事務もやゝ、その緒に着くべし。わが巾幗社會が、盛に國家的事業に力をつくし、意をそゝぐべきは、まさに、この秋に在らんか。去年以來の征清事件にあたり、諸孃は、傷病者の看護に、軍隊の慰恤に、遺族の保護に、みな、ことごとく、國民的に運動したり。臺灣のこと、あに、獨、これを放棄すべけんや。吾人は、方今、婦人が、國家に對する事業の第一着手として、大に、まづ、臺灣共住の緊要有効なることを勸告す。この説たる、一讀、或は、いかゞはしき嫌あるが如し。しかれども、吾人は、實に、將來、永遠の國運を想及し、これが自然の結果より、本論を起せるものに外ならざるなり。（をはり）



婚嫁のことにつきて

水木青蘿

いとうら若き身にて、かゝること云ひ出でんは似氣なき業なれど、老たるが穴勝に知れるにはあらず、若きが必ず得知らじとやは定むべき。耕織は奴婢に問ふべしと云ひけんも、齢を云ふにはあらず、唯其事になれたるを貴むなり、なべて手に取り身に行ふ時ぞかり、人々の深く思ひ圖ることは稀なるべし、深く思ひ圖りてぞ、能く知り能く誨ふるきはともなり得なん。されど子もなく同胞もなくて老朽たらんよりは、なかなかに我こそなど思ひ立ちぬるも、嗚呼のきはみなるべし。

父没かりて、母老にたり、同胞には女子多し、己が夫定めすべき務は全く我が身ひとりなりき。人々の誨を受け、老たる母にことはかりなどして、二人の女子は、はやも人の妻となしぬ。浮世のさがも得知らぬうら若き身が、さまざまに思ひ辿りしこと、なかなかに、年たけたる人々にくらぶべくもあらず。さらで唯、思ひ辿りし限りをわからさまに書い列ねんに、思ひおやまれる節々も多かるべけれど、誠心のはえなしは、正しき道にも通ひもやせん。

先づ撰擇の標準となるべきは品行、地位、財産、才學、家族、血統、容貌等なるべし。唯品行だに良くぞ、など聖人めきて誨ふる人もありぬべし、己はまことに正しき道なるべけれど、ことさらに、貧しきもの、醜きものなど求むべくもあらず、且は慈深き親兄が女子同胞に向ひて強ふべき道にもあらざるべし、されど道ならぬ行ある人は、如何に富めりとも、美はしくとも。

如何にもやせん、そは唯、世の中に慈善家なりとか、名望家なりとか、云ひはやさるゝよりは、誠意ありて憐深く、家內能く治まりて、出入る者、あるは奴婢どもが、まことに誠實しく事ふる人々ぞ、最頼もしき人なるべし、彼の蘇東坡が力可レ以得二天下一。不レ可三以得二匹夫匹婦之心一。と云ひけん、げに世に僞の名は立て得べくとも、心なき賤しき者どもの口さがなきは止むべくもあらず、穴勝にさる者の語は信ずべしとにはあらねど、誠の品定めのなかく\にかゝるきはに多きも、うたてき浮世の樣なりけり。

安定胡が、嫁レ女須三必勝二吾家一者、と云ひけんは、地位に就きて云ひし語なるべけれど、かくも人々が他の上に立たんことをのみ打競ひて、男等は何某の殿の姫君、科長の愛娘など、自がじゝ得なんと爭へど、女子はた、程々につけて、我よりは立優りたるあたりにのみ心を傾くる世に、勝二吾家一ものに嫁がせんとは、いともく\めやすからぬ望なるべし、まして彼の勝二吾家一則女之事レ人、必欽必戒と云ひけんもさることながら、欽と戒とのみが妻たる道にもあらず、程程につけつゝ、ふさはしからん程に、夫を援け家を治むる才なくてやは、妻たる道を盡したりと云ふべき。賤しきものゝ子なりける五代將軍の大奥の人々ぞ、いとゞかしましき名には立ぬる。唯吾家と同じきはなるぞよき。少し劣りたるも何事かあらん、ひとへに勝りたるを望むこそ、なかく\に心賤しげなれ。

「親は苦をする、子は樂をする、孫は河原で乞食する」と云ひけんは、いと鄙びたる言葉なれど、いと深き敎ありとぞ覺ゆる、千金の子に才あるはいと稀なり、そは其心常に富み驕ればなり、されば唯富たるを求めんは眞に其理なし、貧しきは恒の心なしといへり、まことにふさはしからぬ負債負ひたるなどは、心にもあらぬ僞も云ひ出でぬべし。唯富まず貧しからぬ際こそあ

らまほしけれ。ことにあらまほしきは、今富みたるにはあらで、今より後富み榮ゆべきあらましあることなるべし。たとはゞ十万の身代が九万に傾き初めしはいと頼もしげなし、煙も立てかねたるが、やう〳〵に蓄金など爲初めたるぞ頼もしき。

百年の苦樂他人によると云ひけん女の身は、芳しき名を殘こすも、春にもあらで朽ち果つるも、多くはそが夫の才と學とによれり。されど才に富み、學博き夫を求むる事は、さしてとがむべきにはあらず、唯才子學者の空しき名にのみ思ひ寄せたる、何某の女學校など卒業したるが、いと物知り顔に、誰は才なし學に乏しなど、人もなげに云ひけちたるのみぞゆゝしき。

家族の少なからんことを求むはさもあるべきことなり、多きはこと〴〵に煩らひ多かるべし、されども互にいと親しからんには何事かあらん。舅姑あらば、ことさらに夫たるべき人の孝心厚きを求むべし、まことに親として事ふる人と、所夫として事ふる人との、親しからぬばかり、心いたむる業は、世にも又あるべくも覺えず、これぞ最も心して深く思ひ慮るべき事なりかし。世の人はなどてさばかりこの事には心せぬにやあらん、仲人などか、舅君ませども、唯隱居所に籠り居玉ひて、かにかくと云ひ出で玉ふこともなし、何事も唯若君の御心のまゝなり、などいはんは、やがて心驕れる若者の樣も思ひ出でられて、いかに老たる父をないがしろにするらんとも疑はるゝに、まして嫁を迎へなど、老たる母は某の別墅に移さんなど云ひいでたるぞ、うたてき。何事に手づゝなりとも、唯老たる親にまめ〳〵しからんをこそ、など聞きつけたるころ、ゆかしさの限りなれ。

血統は惡しき疾なくてありなん、こと〴〵しき源氏藤原も何にかせん、まさしく大君のおほみたからにしあらば足りぬべし、ことさらに撰ぶべきことかは。顔容

を云はんはいとも末なり、こもことさらに問ふべきにはあらず。

こは只口にのみ云ひ、筆にのみ記すにはあらず、まことに自ら試みて行ひし、眞心を告げ參らすなり。かく種〳〵に思ひ慮れど、御國の風習として、かつては名だに知らざりし人々が、唯仲人の語あるは、縁遠きわたりより、かにかくと洩れきゝたる噂などをかりをたよりとして、ふさはしゝ、あらず、など定むるが多かれど、隈なく思ひ慮りたるに、後にはゆくりなきことなど出來ぬるも、なきにしもあらぬぞゆゝしきや。されどとて西の國の國ぶりときく、若き男女がざれむつみ、踊り狂ひたる中に夫定めすなる、みだりかはしさに比へなど、又なぐさむかたもあるべし。唯誠に思ひ、誠に謹しみなど、天の成せるまがつまは自ら避くる道あるべしとぞ。

藝術

坂本三七郎

古昔孟軻謂へることあり、矢人は豈に函人より不仁ならんや。矢人は人を傷らざらんことを恐れ、函人は人を傷らんことを恐る。之が爲に、人は術を愼まざるべからずと。此語深く世人を警醒する所にして、吾人は移して讀者諸孃左右の一箴となさんとす。孟軻が論ずる所の意は、矢を製る人は一意專心人を傷け人を殺さんと欲す。之に反して甲冑を作る人は只だ之を堅し、之をして矢を受け彈丸を侵すも破れず、其人の身を全せんとするに專一なり。然れども兩者を他人より觀れど、一は人を殺さんとし、一は之を救はんとす、其心は豈に天淵のみならんや。兩者の心先天的に於て、異なるにあらず。其業とする所異なるが爲に、終に業其心を移して、此の如き境にあらしむ。故に業とする所擇ばざるべからずと云へるなり、棺槨を製する工人は人の

多く死なんことを欲し、爲に火葬を業とする者は、虎烈病の夥しきを望み、之に反して祝衣を鬻ぐ家は、人の賀節の多からんを望み、胞衣を納むる社は人の出生の増さんことを希ふ。是れ何が爲に然るか、然る所以を知らんと欲せば、其心を問ふを願はず、其業の如何に心を移すかを思へ、心此にあらずして、而して此の如くなるを知らむ。更に術の擇はざるべからざる所以を知れ。是に於てか諸嬢に敎へんとす。

技を修め、藝を講ずるは、人生に最も必要のことにして、一日も緩うすべからず。況んや德を琢き、理を存じ、學んで實踐し、習ふて躬行す、婦女子最大の行事なり。然れども吾人思ふに婦德女功を修むる外、更に諸嬢が學ぶ所に就て、大に憂ふる者あるなり。琴瑟の音は靜にして淸なり、三味線の響は淫にして邪なり。茶の居を學ぶ人は、座作行歩の何となく輕擧ならざる、歌舞を習ふもの丶常に嬌婇なる、視て以て其風釆を知り、併せて其人品の如何を知る。是れ他なし、其學ぶ所其人の心を移し、術終に矢人函人の境にあらしむればなり。

故に吾人は、常に會する所の婦女子に向ひて、學業の外、好む所あれば、則ち優美の業を取れ。樂めば則ち女德に益あるの術を擇へと、歌を讀んで風月人情を寓し挿花點茶の如き身を淸境に置て、心を靜正に養ふが如き、心身倶に益ありて、加ふるに女德を養ふ端を啓くを得べければなり。其の父母が女を嫁するに當りて、遊藝をも尙且つ之を敎へたりと誇るは、吾人遊藝の二字、果して吾人が稱して德を養ひ藝に遊ぶ道に非ずして、眞に所謂三絃歌舞の遊蕩の技藝なるを意味するを看破す。讀者諸嬢は必らず此の如きなきを信ず、然れとも吾人の憂は、實に此に在て存す。世の年長の貴女令孃は、願くは讀て、之を戒めよ。慈母たる者は最も其子女を膝下に敎導するに於て、十分の注意あら

んことを希ふものなり。術の女子の性に利害あるは、尚ほ家庭教育の善否と同じく、如何に家庭の教へ嚴なりと雖とも、其教訓の術に於て、非ならず他は蕩して曲蹊邪道に導くを知れ。

吾人は既に術の擇むざるべからざるを解けり、然れども更に讀者諸孃が女德を養ふ一端なる座作動儀の一助たる、和歌琴書の如き、插花點茶の如きを學ふにつきて一言せん。

古昔有名なる畫家、大雅堂の妻、玉瀾は書を能くし、又た畫を善くし、殆んど夫妻一世を風靡したる大家なり。吾人は固より彼夫婦か大畫家たり大美術家たることを崇拜す、然れとも若し其の玉瀾、平生の事に就て論せむ、吾人は一家の妻として甚だ之を取らず、古來彼が夫妻を稱して、伯鸞孟光の偶と云ふと雖ども、一國の上且つ女德の上より之を見れむ、豈に欠意なからざらんや。此の如き婦女子あるは何ぞや、他なし、畫に遊び書に遊び、終に吾人が稱する術に沈湎して、或は天眞を得ると云ひ、或は方外に遊ぶと云ひ、又は人生を脱却すと誇る、更に術に溺れざれむ、妙味なしと謂ふ、溺るゝ極、此の如きは女性として、果して善か、一國の根底一家の賢妻良たる者は果して此の如きか、今日の國家、吾人は寧ろ是等の放縱の婦女なからんことを希ふものなり。

今の婦女子の有樣を見るに、技を弄び、藝に遊ぶ人多し、況んや獨立獨行の婦女子頗ぶる多し、此等の婦女徃々其行女德に欠ける所ありて、藝術を専らとし、玉瀾一派の流に失せんとする者あるを見る。故に吾人は術の擇むざるを告ぐると同時に、其術に溺れて、女德を失ひ、流れて歸るを知らざる者を、憂ふ。女性の通道、豈に此の如くなるべけんや、世善美の日本婦女を稱する人多し、吾人乞ふ裏面の觀察者たらん。

女子教育一班（八）

三輪田眞佐子

上に述べつる如く、昔は女子も、漢學を學びけんことは、疑ふべくもあらず、されど今斯の道と、女德とは如何なる關係あるべきものかを考へんに、元來儒學の大要は、道德の學にしあれど、その說くところは、政事にまれ、經濟にまれ、將た歷史にまれ、悉く道德を以て、基原となすめり。故に漢文は、おのづから一般の言語までも道德に因緣あるもの多し、例之ば斷臂の操なる句はむかし王凝任地にありて、死にけるとき、その妻李氏なるもの、夫の尸を背に負ひて、よるべき宿を求めつるに、あな無情なるかな、ある宿の主人、それと見るより、李氏の臂をひきて外に引き出さんとせし時、彼れ泣きて曰ひけらく、あはれこの手は人のためにとらるゝものからと、忽ちその臂をたちて棄てけるより起りしとかや。なほこの類の言の葉いと多し。

されど漢文はよむだに人を訓戒するよすがとならんかし、尤も淸少納言の如く操行の修まらざるは、この學のつみにあらで、その人の至らぬなり。况して漢學には小學の如く、坐作、進退、孝道、婦訓、に關するもの多し、亦殊更女子のためにものせられし文も少からず、そもゝゝわがいふ漢文なるものは、その源を孔孟に汲みしに限るなり。思ふに孔孟の學派は鬼神などのことをいはで、たゞ事につき物に從て、必ず自然を典り、人生に適する道理のみを撰び、專ら實踐躬行を尊びしかど、反て孔孟時代なる支那人の互に虛飾をよろほひ、名利をむさぼり、稍もすれど、一方に割據して相爭ひしころには、容れられさりしとはいへど、眞の道はあかねさす日の照す所、あらがねの土の横る處には、いづこも變らざるものなれどにや、我が瑞穗の國に住なれて、自然の陶冶をうけ、義理を弁へし人民には、かゝるめでたき敎こそ適ふべけれど、上下擧りて

これを守り、ます〳〵人道立つに至りぬ。豈儒學を以て他國の敎と見るべきものかは、反て彼の佛敎の如きは、過去の因緣を說き、未來の應報をいひ、總て幽玄を述ぶるものから、奇を好み、妙を愛する人の心には、よしとおもふならんも、我が固有の美德を害する恐れあり。そは人はこの世にありて、善良なる國民となり終ふるこそ、本意なれど、佛を信ずるものゝ中には、往々遁世するものあり、國家のため口惜しきことなり。中世に至り、低聲柔態を以て、女子の美德となしけれど、その活潑ならんことを恐れて、剛々しき漢字かき、且つ讀むだに、天然の婀娜を傷けんかと慮り、强ち和々しき假名のみを學ばしむるばかりに、心を用ゐ、恒に優美なる德を養はんとて上流の女子には琵琶を彈じ、高雅の德を成さんとて、和歌をよましむる良風なりしに、いつとなう佛敎の影響にや、女子の歌にはわきて厭世的の分子を含むに至り、露だに純粹なる女德を養ふ便とならざりけらし。元來女德を重ずる理由は、父子夫妻など團欒して、生活する良民とならんことを願へばこそ、徒らに世をかこつばかりか、德を養ふ便りとなるにあらず、加之一得一失の相伴ふはものゝ數にや、柔和なる女風をなさんための方便が、害をなせし例もありけり。すなはち源氏物語の常夏に見ゆる如く、雙陸貝合の類を以て、女子の學ぶべきものとなして、遂に其の結果漸々柔弱に流れ、なほ淫風の緖とさへなりたりけん。その後源平時代より武家風の敎育行はれて、再び稍上古の如く、質朴の風となりたり。殊に政子の如きは自の操行はともかくも、女子敎育に熱心したりけりとぞ。

實に自然の敎育法は、萬古不易なるもの、人爲の敎育方は、屢々宜しきを得ざることあり。うべなり摸擬敎育の効をなさゞれば。さればこそ自然を典る儒敎主義の女德は、幾千年の后なる今日までも、用ゐらるゝなれ。

すなはち維新前より今日までの女德を敎ふる書は、女用智恵鑑、女今川、女大學、女四書、列女傳、及び曹大家女戒などは主なるものなりしが、此等のふみは多く儒敎を採りしものなり。故に我が國女子の貞操柔和等の美德は、日本女子固有の美德に由るとはいへ、かの四德七去三從などの敎ありて、これを助けしこと明なり。或曰く、儒敎は酷に過ぎて、女子の天眞を害せりと、おのれは後にこの疑を解かん。

されどわが國の女子が、德操の秀づること、世界に比ひなきは怪むに足らず。且つわが國の女子は如何なる幸にや、女子自ら學ぶを待たで、夙に先哲の士、女德の必要を感じ、大小その敎訓に心を用ゐさせ給ひけり。見よ識見非凡なる碩儒、貝原益軒翁の如きは、最も女敎に注意し給ひて、そのものせられし敎、いと多し。殊に翁は女子實地の言行を訓戒し給ひしから。その父母にさへ心得をものし給ひぬ、即ち女子の嫁するとき、父母の敎ふべき十三條を定め、以て婦の舅姑に事へ、良人に從ひ、家人に接し、及び交際さへかくせよかし、かくなせよといと懇なる敎を垂れたり』亦慧眼卓絶なる偉人、吉田松陰先生も、大に女敎を思はせ給ひて曰く、女子の敎戒の事、先師の深意尤も味ふべし。夫婦は人倫の大綱にて、「父子兄弟の由りて生ずる所なれど、一家廢衰治亂の界、全く玆にあり。故に先づ女子を敎戒せずんばあるべからず。男子何程剛腸にして、武士道を守るとも、婦人道を失ふ時は、一家治らず子孫の敎戒、亦廢絶するに至る、豈愼まざるべけんや。云々と、なほ女子の源語、伊語、等を讀むこと、及び茶湯俳偕などの遊藝につき、評論し給へり。精しきことは先生の武敎講義を見てよ、思ふに今日ほど女子敎育の必要なるはなきに、あはれ翁はあだしの丶露と消え、先生はとり野邊の烟と立ち去りぬ。

（正誤）九十八號十二ページ下段第四行の讀書の方法によりては よらでの誤



小栗助重の妾娥

鹽井ふく子

古來人の妾といふものは、多くは、色をほこり、寵をたのみて、よからぬことをたくらみ、果ては國を亂し、身を亡ぼすもの丶多かるが、小栗助重の妾の娥といふは、またとなき誠ある人にて、げに、群鷄の中の白鶴とやいはまし。世に小栗氏の事を志るせるもの、さまざまありて、さだかならず。或は助重は新田義興の再生にて、照手は十一面觀世音の、かりに人間界に生れ出で丶、照手と妹背の緣を結びしなり、されど照手姫、たび／＼姦婦の毒手にか丶りけれども、よく九死を逃れ得しは、不思議なる菩薩の冥助によるものなりなどいへど、ろは信じがたき荒誕無稽の談なり。されど、照手が九死を逃れ得しといふことは誠にて、其一生を得しは、觀世音の冥助などにはあらず、全く助重の妾の、娥といふもの丶力なりけり。

應永三十年癸卯春の頃に、小栗助重の父なる常陸の國主、小栗孫五郎滿重、鎌倉將軍の命に背きしとて、其年、八月足利持氏兵を出して、結城の城に向ひぬ。これを退治せむとてなり。小栗も兼てより、用意したる事なりけれど、軍兵共を數多城に出して、防ぎ戰ひて、勝敗いづれとも決せざりけるが、鎌倉勢は、一色左近將監、木戸内匠介等を、一方の先鋒とし、また吉見伊豫守、上杉四郎等を、一方の先鋒として、新手をもて、かはり／＼て兩方より責め入りしほどに、遂に城は落され、滿重は參河に、助重は相模に走り、娥が生みてし一子萬千代といふは、矢にあたりて、果敢なくも、戰場の露と消えぬ。

娥は助重と別れて、已が故郷なりける六浦に歸りて、母をなむ養ひ居りけるに、ある夜若き婦人の、相模に行くものゝ由なるが、此の家に來りて、一宿を求めぬ。娥の母は、非道非人の心の者にて、人の困苦を少しもあはれむの情なく、すげなくも斷りけるに、婦人はいと困じて、重ねて乞ひけるに娥つら〳〵と聞きて、其さまを見るに、未だ年若く、かつは旅の勞かれたるに、旅の空に、日さへ暮れはてゝ、嘸うち困うずらむと、そぞろにあはれに覺えて、さま〴〵に母を說きすゝめければ、母なるもやうやくにうけひきて、家に入れぬ。さてさま〴〵の物語りなどして、身の程など尋ね問ふに、兼ねてきゝたりける、助重と深き契りある、照手姫にて、しかも助重の跡を追ひて、相摸へ行かんとするよしを聞きて、娥はふかく感じ、諸共に身の上を語りなどして、かつよろこび、かつ悲しみ、さて臥床など設けて、さま〴〵にいたはりなぐさめ、早くふさしめけるに、照手も大に、淺からぬ情のほどをなむよろこびて、臥床に入りぬ。さるに、娥の母は、婦人の照手なることをきゝて、大に憎みて、竊にこれをなきものになさんと思ひ、已れが黨の人々を呼むとて、外の方へ出で行かむとするに、娥は大に驚き、母の袂にすがりて、あな母上、人として罪なき人を殺すは、禽獸の行ひにてあるものを、ましてや、わが君助重殿に、深き緣を結びたる人を、うちも殺しなむ、わが君を害するも同然にて、世におそろしき罪にや侍らむ。のう母上、自からをかなしう思さむ、諸ともに、力となりて給はれといへど、母は元より獸心、人の子の諫などは、耳にもかけず、わざ笑うて、無益なる情だてなせそとて、袖をもふり切りて外の方へと走り出でぬ。娥はいとゞ悲しくも、淺ましくも、をもひ煩らひて、母上こはあまりなり、母上のうと呼べど、耳にも懸けず、はや影さへも見ゑずなりぬ。娥は思案もつかで。茫然とたゞ

すみしが、斯くてあるべきにあらずとて、急ぎ立ち歸りて、照手の臥床にいたり、呼び起して、さて云ふやう、わが君に由緣ある人とききては、いつまでも止めたくは、思ひはべるを、我が母の腹のきたなさ、御身をば失はむとて、妾が諫むるをも聞かずして、今しも、同志をば呼びにとて外の方へ走りゆきぬ。此處に御身のかくありては、妾如何ばかりこゝろを碎き侍るとも、救ひ參らせむ道もあらざれば、夜半といひ、かつは、日ねもす、つかれさせたまふ處なれど、疾く／＼逃がれさせ給へとて、道などかれこれと敎へなどして、いざとく／＼と、急がすに、照手も事のよしを聞きて、大におどろき、かつ娥の志に深く感じて、妾の命は惜しからず、御身妾を逃がしなば、後にて嘸ぞやうらまれむに、此まゝになしおきたまへと云ふを、娥はうちけして、いな／＼、後の事どもは、妾よきやうに量ることのあれば、とく／＼にげさせ給へと云ふ。照手は立ち去りかねて、なほたゆたふを、とく／＼逃げさせ給へ、母をして罪を犯さしめじと思ふ妾の心を汲みたまひて、まげてにげさせ給へ、とく／＼と急ぎ立つるに、照手も心ならねど、娥の情をあだになさむもとおもひて、やうやくに受けひきしに、娥は大に歡び、涙ながらに送り出でゝ、申すまではあらねど、わが君に逢ひたまはゞ、御心つくして仕へさせ給へ、妾が母の今日のことは、包み給ひてよ。夜道といひ、かつは婦人の御足にて、嘸かし困じたまはんとおもへば、誠に安きこゝろもあらず、よく／＼用意し給ひてよ、さるにても、深くもゆかりある人に、一夜の宿をも貸し參らする事かなはず、此夜半に、旅なれぬ御身を、ひとりはる／＼と、出立させ參らする事、我ながら誠にあさましうおもひ侍りぬとて、去ばし空をばながむるに、月も見るに忍びずとや、むら雲の中にかくれて、行方もわかぬ闇の夜、はや更け渡りて、鐘の音いともの

凄し。照手もいと〻別れを惜しみつゝ、泣く〳〵も出で行くあとを、しばしは見送りしが、やがて立ち返へりて、照手が伏し居りし床の中に入りて、打ちふしたり。やゝしばらくして、母親は兇徒共を促し來り、ひそかに照手が臥床のほとりにたゝずみて、寢息をうかがふに、いとも靜なりければ、折ころよけれとて、兇徒どもに云ひ傳へて、石もて女子の首をぞうたしめたり、今は仕留めはてしと覺えけれど、あかしかゝげて、よく〳〵見るに、照手ならで、わが子の娥のあけに染まりて、息も絶えはて居たるに、いたく驚きて、狂氣のごとくに立ち騒ぎて、わが子よ、娥よと叫びけれど、香魂一たび去りて、玉眼再び開かず、芳容寂莫として、はや此の世の人にあらぬに、母親も、大に己れの過を悟りて、照手の跡を逐はむともせざりしとぞ。實に此の娥の如き心を、世の中の人のもちなば、何家の騒動、かの家のあらそひなど云ふことは、たえて無からむに。

北條時宗室

重田星江

比翼に類へ、連理に譬へて世のあらん限、路のつきんはても離れじ放たじと盟ひたる妹脊の道の、如何なれぞ空閨の歎多く、孤枕の怨を漏すぞ、實にやむかし太掖の芙蓉、未央の柳も、馬嵬一片の塵と消え果てゝは、綿々として長生殿の契を恨ましめたり。

あはれ生あるものゝ習とて、後れ先つ世の常には、上も下も得免れざりけり。さるにはあらで、男女のさせる事より相惡み相怨みて家をも亂し身をも誤るものは、これぞ哀と云ふ哀の最もあはれなるものなるべき。男にも男の罪あり。女にも女のとがあるは、問ふべからず。妻の爲に歎ける夫、つまのために怨める妻、世に救ふべき途はなきか。

等しなみに人とし生れたるもの、何れか勝り何れか劣りのけぢめあるべき。野蕃と云ひ未開といふ、幾千年

の其上はいざ、とり分きて人と云ふ頃になりては、一男と一女と結び交はし下紐を他には解かせじと誓ひけん、古は誠にかくなんありき。今も尙かくぞあるべきに、支那の學風入り來てより、女子はおしなべて卑しきものと思はれけり、まして武家武門の世となりては、一夫一婦と云ふことは舶來の敎にはあらで、我邦の維神の道になんありける。されど畜妾と云ふことは、惡德の最上なれど戰國の頃は甚しくも行はれて社會の風とは成り、閨門のみだれも多くは此惡德よりぞ起りける。

夫と云ひ妻と云ふは、相むかへての名にこそあれ。もとは根を異にせる梢なり。幹をべちにせる小枝なり。この梢、此小枝を結ばんに、などか赤繩の弱くてあるべき、誠を失ひ情を欠きては、もとの梢にかへるべく、もとの小枝と離れつべし。唯だ男子の世界は廣くて慰めんに方はあれど、心も狹き女の身こそはかなき事の限なれ、百年の苦樂他人によると古の人はむべも云ひたり。

鎌倉に杖を曳く旅人は、圓覺寺を見ては、時宗公が古を忍べど、門を出でゝは更に建長寺に向ふなり。建長寺に至る者は、小袋阪より雪の下へと急ぐなり、圓覺寺とは同じ山内に在りて、しかも建長寺と程遠からぬ松岡に詣づる人は、最と稀れ〳〵にて、たま〳〵來るものさへなみ〳〵の寺とのみ思ひ過ぐめり。

此の松ヶ岡は東慶寺と云ひ、禪臨濟の比丘尼寺にして、弘安八年の建立なるが本寺もなく、末寺も無し。德川の頃は御朱印の高永百十二貫三百八十文開山は潮音院覺山志道和尙、五世は用堂和尙、二十世は大秀ノ泰和尙と知らるべし。

弘安八年とは如何なる年ぞや、時宗公が身まかりし次の年なり。志道和尙ろも何人ぞ、同じ公の北の方が遁世の名なり。

此の比丘尼寺は縁切寺とて、世に知られ、夫に別れんとする妻の、駈け入るを受けて、其が縁を切る事をも寺法の旨とはなせりき。

徳川寺社奉行記錄に、幕府と松ヶ岡との往復を載せたり。

寛保三年、武州、鳥山村、幸助妻、

寶暦四年、上總國、埴生郡、市野野村、市五郎妻、

明和五年、十月下總國、葛飾郡、西寶珠花村、吉五郎妻てふ、

寛政十二年、八月、武州、葛飾郡、西小松川村清吉妻まつ、

享保三年、五月、本所松倉町、淸助店伊八養女いろ

文化二年、五月道有屋敷、家持善兵衛妻とめ、

仝　年、仝月本芝二丁目忠藏店淸兵衛妻いよ、

逃げ入りたる女の家督出入などについて、公儀の御尋もわらんか、勘定奉行より書付を此寺の役人と云ふに送りて、其女の答をしるし上らしめたりしが、明和五年には、奉行安藤彈正少弼より、初めて其女を幕府に差しいだすべしと命じ、寺よりはさる法古よりなけれども、寺例書と云ふものを上りて、二たび三度出入に及びぬ。奉行所の指圖にも堅く從はざりし威權ははた何にかよりけん、實に此寺ころは幕府の法律の外に立ちたるものなれ。

いざ此處に寛政十二年八月の例を引てん。武州葛飾郡西小松川村の百姓淸吉が妻まつと云ふは、淺草新鳥越町藤兵衛店善四郎後家ちよと云ふもの丶女にて、寛政十年三月東小松川村百姓與左衛門が養女となり、やがて其の媒にてめでたくも新枕の式を擧げたりしが、僅が二年を經、同じ十二年六月二十九日と云ふに、まつはふと出でたるま丶家に歸らず、何地ゆきけんと思ひしに、養父がり隱れたるを知り得たれど、夫淸吉は尋ねゆきたれど、妻には得逢はずして、與左衛門と口論

の末たちまはりて、何れも傷など負ひて、訴へ出でたるに、まつも召されて御尋などあり、幸にも人のとりもちありて事なく濟みにたれど、まつはまたも養父が家より逃れ出でたり。清吉は又もや怒りにいかりて與左衛門等を相手取りて、訴訟に及びたりしかど、與左衛門も心ならず實母なるちよと相州高座郡西俣村に身よりなる百姓百助がり趣きしに、まつははやくも松ケ岡に入りたりと知りて、直に寺に行きたれども實母にも養父にも渡さじとなれど、詮なくて奉行所に訴へ出でたり。さる處に八月朔日東慶寺の役人中津川喜内と云ふもの次に載する書をさゝげ、西小松川なる村役人方に來り宿りて清吉に示し離緣の一札を認しめ、若しさる所存無くば月日を定めて寺の役所に來るべき請書をいだせといへり

當寺へまつと申　女　駈入離緣　寺　法　願　候に付樣子尋ねさせ候へ共相州　高座郡　西候野村　百助娘　の由いよいよ其方妻に紛無く候哉苦勞なる寺法勤兼候半ゝ不便に存立歸り候やうにいろ〳〵異見申させ候へ共、存切能越よし申て達て願候まゝ、據なく雙方屆出、公儀法式にても受候ものにて申分候はゞ證據とり添へ、爰許役所へ參り申さるべく候、樣子聞屆伺候て申渡すべく候、尤申分なく候はゞ以後障なき書付に印形いたし遣し、參り候に及ばず候、古來より

御免の寺法ゆゑ抱置く事に候、何れも立會埒明あまたの難儀になり不申候樣に致べく候慈悲の寺法念を入屆かくの如くに候以上

鎌倉松岡山一老

蔭涼軒

八月朔日

印

葛西領西小松川百姓

夫　清吉

名主組中

如何に果てけん、知らず。

松ヶ岡に入る女は何れも直ぐなるものにしも限るべからず、道に背けるものもあるべく、法を破りたるもあるべし。外にはよる邊も無けれどと、愁ひ歎きて、自らもきえぬべき女どもはなか〳〵に憫みかなしびて、寺法に從はしむる物から、かゝるきはなるは一わたり公儀にも屆け聞ゆるなり。

罪なくて情を知らぬ夫に虐げられ、人に羨まれし身の今は人の上を羨み、赤きを色の粹とのみ思ひたりけん、娘子の昔を戀ふる女子は、ねもごろに說き慰めて、もとの鞘に納めんとはすれどかたく思ひ立ちたるは寺法に從はしむるなり。

かくて離緣の一札を得、二年を山内に送りて、親の家に送られたる女子はさも再び生れ出でたらん如く、何れの男の子に歸がんもまゝになりて、さきの夫は指をだにさすべからざるなり。

こゝに掲げたるは公儀の沙汰に上り記錄に留りたるばかりにて、いづれ下賤ならぬはなけれど、大諸侯の北の方さへ入り給ふに、一札は心よげに送り來しながらみろかに武士どもに意をさづけて、寺に亂入せしめし事もありしと白髮交りの老翁は物語けり。

世に幸薄き女子の此寺の惠の露に沾ひて或は再び破鏡を完くし、覆水を收め、あるは新に比翼と契り、連理と睦び、或は姿をかへ、戒を持して、是空と悟りたる其數を知らず。

あはれ家無しと敎へられたる女子が蔭と立ち寄る、松ヶ岡は實にぞ時宗公の北の方が草創なる、人の爲、後のためにと、北の方が情の泉ははてもなく底ひもなかりき。はても無く底ひもあらぬ情の泉はなどか又北の方が時宗公に仕へまつりし心の誠ならざるべき、ありし昔は背の君に、後れしあとは女子にと心盡しの程ぞかしこき、されど後醍醐の御門の姫宮も慕ひ來まして

第五の院主となせ給ひ、豊臣秀頼の息女も身を寄せて第二十の法燈をころは繼ぎにけれ。

家政

活花（十）

田邊和氣子

千代のためしといひ傳へたる、菊すらも、うつろひはてゝ、花なき頃のさう〴〵しきに、山茶花のひとり、時を得顔に咲出たるゆかしとも又あいらし。されどこを手折らむも惜けれど、床の上なる花瓶に、さすべきものもあらざれど二枝三枝うしろのかたを折とりぬ。山茶花は普通の花なれど、活かたに大なる差なしといへど、木の枝にれのづから裏表あり。されど表のかたを副の出る方にして、副は又表の方を眞の方へ向け、体は眞の方を仰ふぐ樣にして活てよし。枝の都合によりては、おのづからなる小枝を、副とも体ともする事あり。ろは其時の都合による事なれど見計ふべし。數は三本又は五本七本枝の恰好によりて用ゆ。花數多きものなれど、かぞへがたしといへど細かきつぼみはと



もあれ、花の數は半なるかたよし。又時としては体に小菊など用ゆる事もあれど、かゝる花多ものは一種活るこそふさはしけれ。

たちぬひ

西山たい子

(十三) 女物袷の縫ひ方

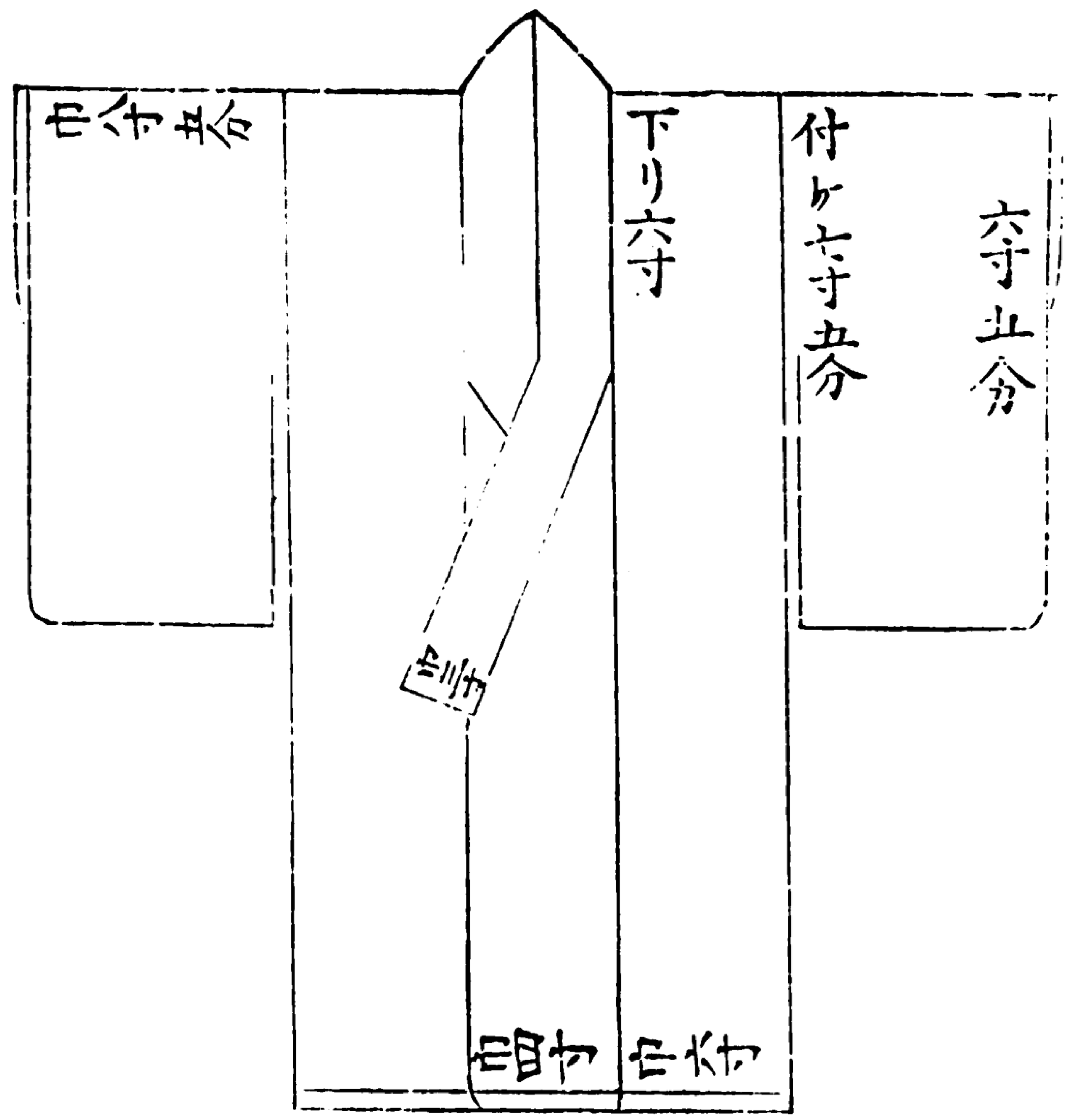
まづ、袖をぬ、四つ縫ひになしおきて、次に表身の脊腋、及び、裏の脊腋とをぬひ、丈くらべをなして、ふきを一分ばかり出して、裏表の裾を合せ、よく合せて脊腋の縫ひめを、間にて綴ぢて、それより、衽を裏表とりて、褄をこしらへ、それを縫ひて、前巾を定めて、衽のうら表にて、前身を包む如くに。間に入れて、四縫ひになし、ひきかへし、褄下をも、また、うらよりぬひて、よく條をつけ、引きかへし、襟をも、また、うら表にて、身衣を包みて、四つぬひにぬひつけ、くけて、袖をつくるなり。されど、大方の人は袷をも、綿入の如くに、衽までうら表を別に縫ひて、裾を合せ、脊、腋、衽のぬひめを、間にてとぢ、襟をつけ、袖を付るもの多し、それは、何れにても、人々の心にまかせて、縫ひ給へかし。

(十六) 女物綿入れの縫ひ方

綿入れは、袖も、身衣も、うら表を別にぬひて、裾を合せ、襟をも、表襟は表身につけ、裏は裏身につけて、四袖をぬひ付け、例の如くにして綿を入れ、衽のぬひめをさきにとぢおきて、絎べきところをば皆くけて、脊とわきとを、のとぢにすべし、のとぢとは、縫ひめの間に、針を通して、うら表ともに、針めを出さぬやうにとぢるなり。また。ふり、袖口等は、綿を入れざるさきに。其處だけへ、綿をくゝみおくもよろし。寸尺等は、單物の時に云ひおきたれど、此處には

略しぬ。

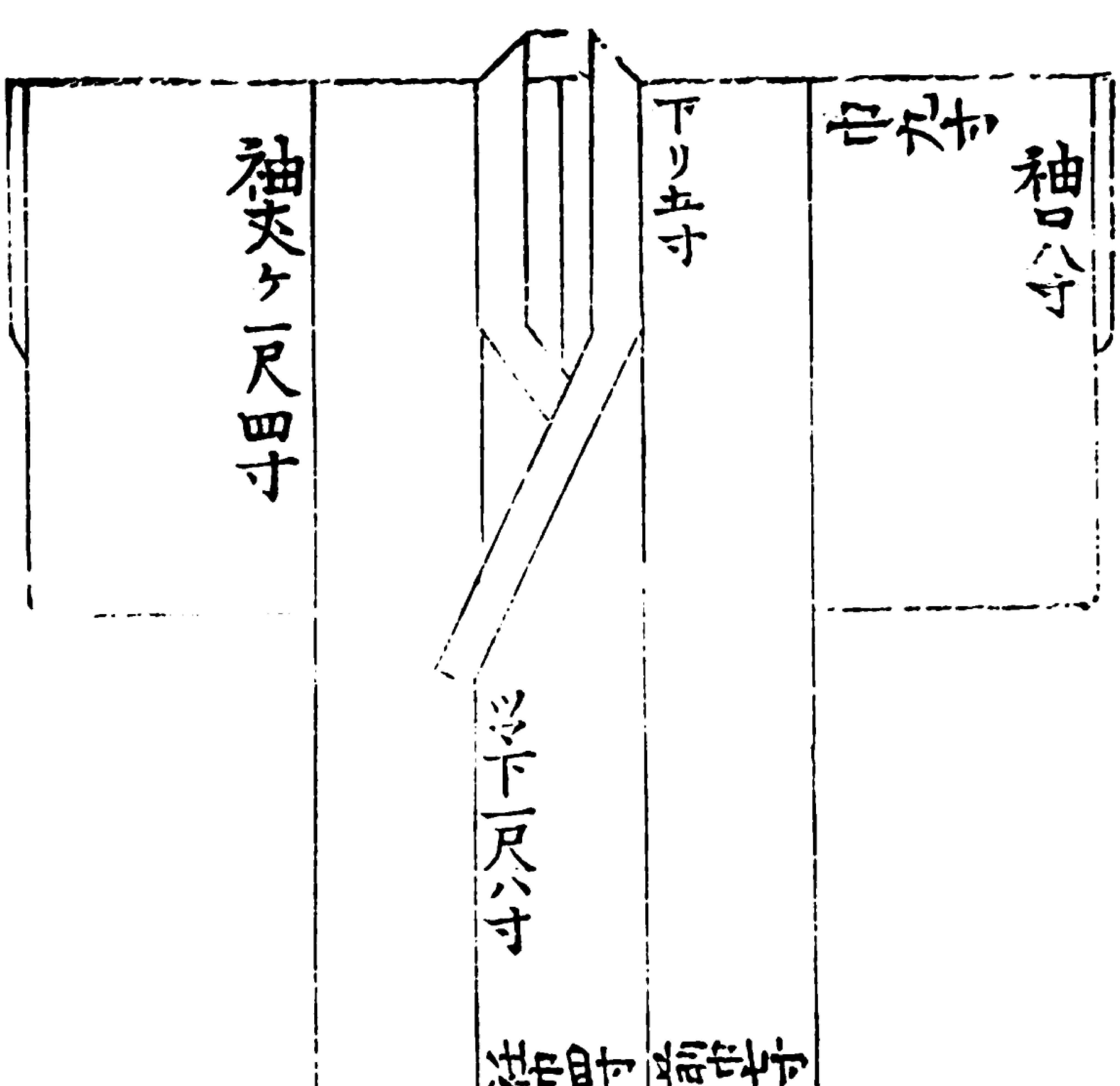
女物綿入縫ひ上りの圖



（十七）男物單物の縫ひ方

まづ袖をぬひおき、脊縫ひを女物の如くにして二條ぬひ、肩當をも皆女物の所に云ひし如くにしてこれをわで、長きものは、着丈けだけに、腰にて揚げてぬふなり。其揚げをするには、まづ後身を腋明より、一寸をかりさげて、長きものだけ揚げ、前身は又後ろより、なほ、一寸だけ下げて、同じ着丈けに揚げて縫ひ、衽

男物縫ひ上りの圖



をつけ、襟をつけて、袖をつくるなり。男物には、ふ

りはあらず、皆縫付くるべし。但し人形になさんと思はゞ、まづ寸尺を定めて、付けんと思ふだけを縫ひつけ、ふりとなりし處を、裏よりぬひれくべし。
寸尺等は縫ひ上りの圖にあり此外後巾は八寸、着丈けも並みは三尺七寸なれど、人の大小によりて、其人に合せて見つもるべし。

だいどころ

ライスカレー

玉葱を縦に二つ割となし、其小口より薄く切りたるを、「バター」(「ソップ」の脂を用ふるもよし)にて炒り、牛肉を厚さ二三分に一寸程の大さに切り、之を前の炒りたる玉葱に交ぜて、再び炒り、之に「カレイ」の粉、小麥粉と牛乳とを混和し、食鹽を以て調味し、文火にて凡そ一時間程煮るべし、其煮えたるを待ち、之を飯と別の器に盛り、又は飯の上に掛けて食用とするなり。

ハンバグ、ビフテーキ

牛肉の筋を取り、よく叩き、胡椒と鹽とをよき程に加へて、更らに叩き交ぜ、小判形に縦三寸位に固め、別に玉葱を極く細かに切りたるを、小判形の兩面に付けて之を「フライ」鍋にて「バター」を解きたる處に入れ、兩面より交る〵〵燒くべし。其燒けたる肉をば揚げ置き、殘りたる汁に「セリー」酒、又は葡萄酒に、小麥粉、よき程を加へて、攪まはし、其味を調へ、前の肉を皿に盛りて、其上に此汁を注るなり。

佛蘭西コロッケ

芝海老、(くるま海老にてもよし)を鹽湯となし、其皮を剝き、塞の目に切り、別に「バター」を鍋にて解かし、之に小麥粉と牛乳を少し宛入れつゝ攪回はし、其丸るめらるゝ位の軟かさになりたるとき、前の海老を「バ

ター」にて炒りて、之に混和し、器に取りて冷まし、其冷めたるを待ち、楕圓を細めたる形に、凡そ二寸位に固ため、之にパン粉を附け、其上に雞卵を塗り、又たパン粉を附けて、牛の脂にて揚ぐるなり。

煮込小鴨

小鴨の腸を去りたるものと、人參と葱の薄く切りたるを「バター」、又は「ソップ」の脂にて炒り、之に食鹽と胡椒を加へて、鹽梅し、更らにコゲる程炒りたる處に、小麥粉と「セリー」酒に「コゲ」汁を加へて、之を一時間程「ストーフ」にて蒸煮となせば、出來るなり。

サラダ

芥子と胡椒を酢にて解き、牛乳と橄欖油を加へ置き、別に「サラダ」の筋を取り、其白き處を一寸位に四角に切り、之を前の汁にて和ひ、肉料理の附合せとなし、又は是ればかりを別の器に盛るべし。

カツレツ

牛肉又は鳥肉を三寸位の長さに厚さ五分位に切り、庖刀の「ミネ」にて叩き、鹽と胡椒を撒り掛け、之にパン粉を附けて、雞卵を塗り、其上にパン粉を附け「フライ」鍋に「バター」を解きて、之を燒くべし。

ヲムレツ

牛肉と玉葱を細かに切り胡椒を少し加へてバターに炒り置き扨て雞卵し破しよく攪はし食鹽少量を加へて鹽梅しフライ鍋にバターを解かして之に鹽梅したる雞卵を投じ其半熟程になりたる處に前の炒りたる牛肉と玉葱を置き兩方の端より包みて作るなり。但し柏餅形に作り、普通の包方なれりとす。

ソース

「ソース」を製するには、芥子を解き置き、葱を細かに切り、湯で雞卵の黄身を裏漉にてこし、此三種を交せたるものに「セリー」酒と橄欖油少量を加味し、更らによく攪まはし「ビフ」の冷めたる處に注けて用ふる

なり。

このごろ

鋤柄義子

新嘗祭　去月の二十三日なりき。ことしの初穂を神にたてまつりて、祭をおこなはせたまふなり。農家をはじめて各氏神にまうでゝ、わがつくれる初穂をさめ奉るべきなり。

野門門、まつむうどともいへり、五尺ばかりの畦に、深かさは二尺ばかりにほりて、こえをしきて植うべし。春になりて、芽の出でゝ、のびまさるにしたがひて、だん〳〵につちをかくれど、白根おほくてよろしきなり。こやしにはこはを少しづゝいるゝもよし。

煙草の苗地こしらえをなしおくべし。

竹をきるには此頃まではよし。これより後はあしゝ。

うど、みつは、にごみをかくべし。

みつかん、きんかん、ゆずのたぐひは、このごろみな熟するなり。

くちなし、とるべし。からたちの實をうゝべし。

くだものゝわかぎなどには竹をそへてしもよけゆきよけをなしおくべし。

柿、梅のたぐひ、のみならず、夏木の接木する臺木はこのごろほりて、かりうゑすべし。

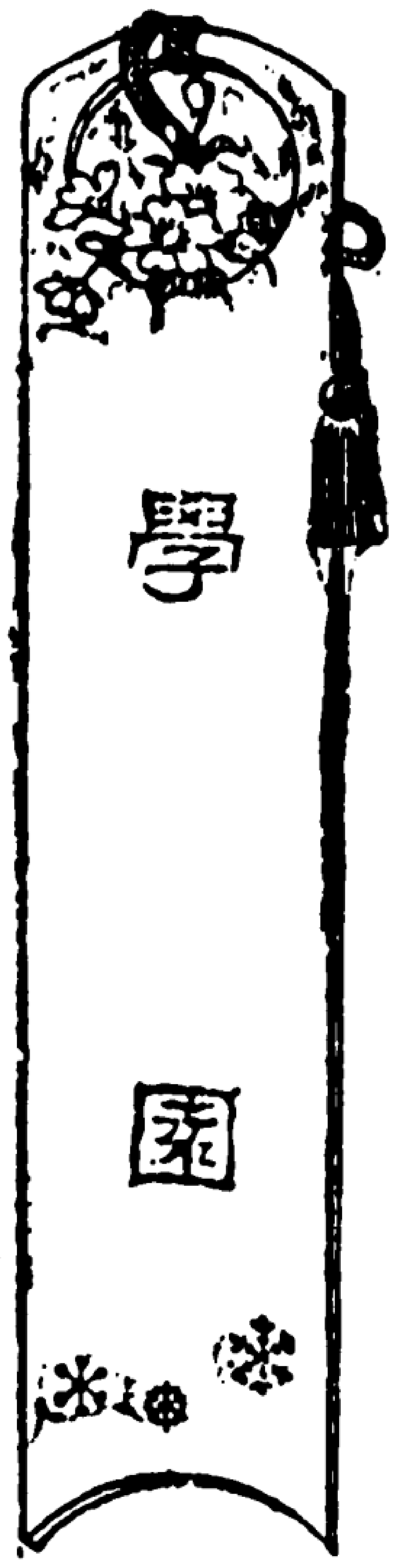
たねものねずみの用心あるべし。

べにの花、暖國にはこのごろまきてよし。

蓮根、くわゐ、ほりとるべし。

桐の木も松の木なども、きりとりてよし。

大根などこのごろぬき初しむべきなり。種にするにはさきのふときを撰ぶべし。すこしさきをきりてうゑれくなり。これをかこひおかんには、土にうづむるはあしゝ、葉をきり去りて、土をあらひおとし、一日日にあてゝ、さて桶か、箱に入れて、風のあたらぬやうに貯ふれど、いつまでも、味かはるものにあらず。



わが學園

（二）祝詞

鹽井正男

古代の文學中、韻文として見るべき歌謠の事に就てはかつ〳〵ながら、其大樣を前々のべ來りたれど、こゝに筆をとゞめむ。さて、其他には古代の文學として見るべきものは、所謂彼の延喜式といふ書中にあつめられたる祝詞と稱するものなり。延喜式は十卷の卷數あるものにて、此祝詞式は其の中の第八卷にあり。祝詞は通例は單に「のりと」とのみいへど、「のりとごと」といふ方正しきなり。「のりと」といふは、それを略していへるなり。されど、古事記の天の岩戸隱りの條りにも、天兒屋根命布刀詔戸言禱白スといひ、万葉集の十八の卷にも、奈加止美乃布刀能里等其等伊比波良倍などあるにて知るべし。延喜式の祝詞式にのれる祝詞をあぐれど、

祈年祭、此の祭りは五穀の豐かに稔るべきやうに、神々に禱りたまふ祭にて、二月の四日に神祇官にて行はせ給ひしなり。今も朝廷にて行はせたまふ。此の時に神前に白す祝詞あり。

春日祭、春日の神社は大和の國の添上郡に在りて、今は毎年二月の一日に御祭りあり。その時に神前にまをす祝詞あり。

廣瀬大忌祭、此の神社は、同じく大和の國の廣瀬郡に在りて、毎年四月七月の四日（今は四月の四日にのみ）御祭りありたり。毎時風の神と共に祭られ穀物の稔らむやう禱る祭りなり。此の時に申す祝詞あり。

龍田風神祭、此の神社は、大和の國なる平群郡に在

りて、風神を祭れるものにて、毎年廣瀬の神と仝じく、暴風ふかで五穀の稔るやう御祭あり此の時神前に申し上る祝詞あり。

平野祭、此の神社は、山城の國なる葛野の郡に在りて祭りは四月と十一月との上旬の申の日(今は四月の二日と定めらる)に行はれたり、其の時白す祝詞。

久度古開、此の二神は、もとは大和の國に在りしが、今は山城の平野へ遷つされしにて、故に久度の神の如きは、なほ大和の國の平群郡なる久度村にも御座します。この神を祭るのりとあり。

六月月次祭、此の祭りは、元來神々の國家を加護したまふ、恩徳を謝し奉り、なほ行末も變らず御加護あらんことを祈る祭りにて、毎月行はせられしを後に六月と十二月とに集めたまへるなり。

大殿祭、此の祭りは、大殿に災禍にかゝる事なきやうに、宮中にて行はせ玉ふ祭りにて、屋船神を祭るなり。祭りを行はせ玉ふは、新嘗祭の翌日なり。此の時の祝詞。

御門祭、この祭りは、大殿祭を行はせたまふ時に、同じく御門の神を祭らせたまふなり。此の時に白す祝詞。

六月晦大秡(十二月准之)、これは六月と十二月とに朝廷に仕へ奉る官人どもが皆朱雀門に集まりて、各過ち犯せる罪穢を秡ひ清むる事にて、こはいとふるくかの伊邪那岐の御神が伊邪那美の御神を慕ひ給ひて、黄泉の國に至り給へる穢れを清め給へる古事と、須佐之男命が天罪を犯したまへる時、秡物を出させて其の罪を贖ひ秡へる古事とによりて起れる神事にて、此の時の祝詞は最うるはしくればゆ。この大秡は國々の人民までも行しなり。

其の他には東文忌寸部が横刀を献れる時の呪文、及び火災を防がむ為めに、毎年六月と十二月との晦日に

行はせたまふ鎭火祭に白す祝詞、及び疫鬼邪神の京城に入り來る者を、ふせがん爲に其の途上に御饗を供へ置きて、塞の神をまつりてその邪神の入り來らぬやう遮り遏むるため、毎年六月十二月の晦日に内裏の外廓の道上にて行はせたまふ祭りなる道饗祭の時に神前に白す祠詞、及び其の他には大嘗の御祭の時の祝詞、鎭魂祭に白す祝詞、及び祈年祭、六月十二月の月次祭などに、特別に伊勢の大神宮豐受宮に白し奉る祝詞數篇と、大神宮の御祭事の中にて最大切なる御祭なる神嘗祭の時に白し奉る祝詞と、齋内親王の入らせたまふ時の祝詞と、二十年に一度大神宮の御造營あらせらるゝ時敕使の白す祝詞と、崇りをなす惡神を遷しやらふ祭りの御時の祝詞と、唐土に使ひを遣る時に、船を守りたまふ御神なる攝津の住吉の神社に幣帛を奉る時の敕使の白す詞、御即位の度毎に出雲の國造が朝廷に參上り來りて申し上る賀びの詞等なり。種々なる種類ありて、これを神々に申し上るにも中臣氏の爲すあり齋部氏の申すあり、奉幣使の申すあり、宮司の申すあり、いろ〳〵なれど、とにかくに皆神の御前に告げ奉る詞にして、以て神の御威徳を稱揚し、神の御機嫌をよろこばせ奉り、災禍を除き、幸福をもとめむと欲するに出でたる文なり。神のきかせ玉ひて、御心に歡び玉はんやうに、對句などをはなやかにうち並べ枕辭などをおもしろく取りなして、つとめて詞の優美ならむやうにかざりたるものなれど、聲調おのづから優美佳麗しかも莊嚴にして、散文とはいへど、又一種の歌ともいはまほしき樣子を爲せるものなり。韻文にして散文に近く、散文にして韻文に似たるものなれど、此の頃或論者は、これを歌なりとさへいふあるなり。されど決して純粹の歌にあらず、むしろわが國散文の嚆矢ともいふべきものにて、なほ全くは韻文の狀態を離れざる散文と稱すべきものなり。そはとにかく皆神を敬ぶ

こゝろより出でたる文學にて、元來わが國の上代は神を敬び尊ぶ心篤く、天皇すら、祖先にまします御神たちを祭り給ふ事を、御代志ろしめす本とさへせさせられたまひしほどにて、ればし立ち給ふ事あれど、或は國家に事あれど、みな先づ神を祭り給ひて、神の御心にはかり給ひ、又神の御怒によりて天下に災禍れてれりとしらせたまひては、れろれかしこみたまひて、これを祭らせ給ひし事などもありき。こは上代の歴史を見む人、容易に知りうべき所なり。實に上代の人は神を敬ひ神を尊み、神をよろこばせまつらんとつとめたり。美しきものあれど、直に神にたてまつり、珍らしきものあれど、先づ神にたてまつりしなり。盞尊の天上よりやらはれたまひて、出雲に下り給ふや、氷の川上に櫛名田姫を助け玉ひて、蛇を退治したまひて、奇しき劍を得たまひしかど、直に天照大神に献じ給へり。鏡をつくるも、玉をつくるも、たへを織るも、にしきを織るも、皆うるはしきは、神に奉つり神の御心をよろこばせたてまつらむとする敬神の材に爲したる故に、我國の美術は、神に進献するといふ敬神の念慮より起りたるものなりとさへいふなり。祝詞も實に言語上の美術品なり。神をよろこばせ奉らむとして作りたる言語上の美術品なり。即ち神祇に奏する一種の文學なり。

此祝詞といふものは、何時の頃より作られしものなるか、又誰人の作りたるものなるか、定かならず。もとより定かなるべきいはれなきなり。祝詞といふ語のはじめて史に見えたるは、古事記のいさなきの命いさなみの命の御子うませたまふ條に、天津祝詞太祝詞事て卜申しきとあるか始にて、次は天の岩戸隱りの一條を記るせる所なり。

天の岩戸籠りといふは、即ち彼の神代に、素盞嗚尊、天照大神の營み給ふみ田の畔を毀ち、或は溝を埋め

などして、いたく亂暴を働かせ給ひ、はては大嘗の御殿に屎まりちらしなどせられ、なほあきたらず、遂に天照大御神の忌服屋にましまして、衣を織る少女をして、神の御衣を織らしめ給ふ折から、其服屋の棟を毀ちて、天の斑駒を逆剝にして、其服屋の中に落し給ひしかば、衣を織り居たる少女は驚きて、其がまゝむなしく亡くなるやうの大事に至りしかば、大御神も、あまりの亂行にさすが堪へさせられずなりて、天の岩屋戸を閉ざして、其が中にかたく籠らせ給ひしかば、高天原は皆闇く、葦原の中つ國も、全くぬば玉の闇夜となり、萬の妖ひ悉く發りしかば、八百万神相共に天の安の河原に集ひ給ひて、高御産巣日神の御子なる思金神の思案によりて、先づ大御神の御心をなぐさめ、御恚りをなだめ奉らむとて、常世の鷄を澤山にあつめて、鳴かしめ、また伊斯許理度賣命におはせてうるはしき鏡をつくらしめ、また玉の祖命におはせて、八尺勾瓊の五百津の御須麻流の玉をつくらしめ、天の香山のうるはしく大なる賢木を根こじにこじて、其の上つ枝にはかの作りたる玉をかけ、中つ枝には八尺鏡をかけ下つ枝には白にきてと青幣とをかけて、布刀玉命これを取りもち、天の宇受賣命には、おもしろき裝束して舞をまはせ給ひ、大御神この遊びを見給はんをりに直に御手取りもちて引き出で奉らむとて、天の手力男神は岩屋の御戸のほとりに隱れさせたまひなどして、大御神の御こゝろをなぐさめ、ふたゝび岩屋より出でたまはむやうはからひたる時のことをいふなり。此の時に天の兒屋根命布刀詔戸言禱白スといふ事あり。大御神も此の天兒屋根命の「のりと言」をきかして、非常にめでさせ給ひ、御心もやゝとけたまひたりといふ事は、古事記には見えねど、書紀に見えたり。そは日本書紀に、この事を記したるを見るに、大御神これをきゝたまひて、この頃人々數多請ひ申すものありたれど

いまだ斯のごとく詞の美しきものをきかずとて、いたく感じたまひ、岩屋の戸を細目にわけ給ひて、見そなはし給ひけれど、手力男命これを強て引き出し奉りしといふ。これにて「のりと言」はうるはしき詞なるを知るべし。この文によりて見るに、此の以前にも、神さまに申す「のりと言」といふものはありたるならむも、此の時の天兒屋根命の申されしは、殊に美しきものなりしとればゑたり。とにかくに「のりと言」といふ詞の歴史に見ゑたるは、此の二ことところが初めなり。されど、さきの天津祝詞も、このときのも今の世にはつたはらず、身潔の詞をもて天津祝詞なりといひ、あるは其他くさぐさの説あれどもくはしからず。

明石の浦

井上頼文

ほのぼのと　明石の浦の　朝ぎりに　島がくれゆく　船をしぞおもふ

といふ歌は、幽致高遠にして、餘韻きはまりなき歌なり。さて、此歌のよみぬしを、人麿朝臣と誤り傳へたるより、朝臣の像を畫ける上には、大かた、此の歌をしるせり。こはいとあたらぬことにて、朝臣は本意なく思ひ給ふらん。すこしく歌學に通じたらん人は、誰も知りたる事なれど、いまだしき人の爲めに、今その誤りを辨へんとす。

抑、この歌のよみぬしは、柿本人麿朝臣にはあらで、小野篁朝臣なり。さるをかく誤れる所由を、如何にと尋ぬるに、

古今集の、羇旅の部に、隱岐の國に流されける時に、舟にのりて出でたつとて、京なる人の許につかはしける。小野篁朝臣

わたの原　八十島かけて　こぎいでぬと　人にはつげよ　あまのつりふね

といふ歌の次に、題しらず詠み人知らず、

みやこいでゝ　けふみかの原　いづみ川　かは風さむし　ころもかせ山

といふ歌に並べて

ほのぼのと　明石の浦の　朝霧に　島かくれゆく　舟をしぞおもふ

とありて、此の歌は、或人のいはく、柿本人麿がなりと、あるが、即ち、あやまりを後世に傳へたる初めにぞありける、こは、貫之朝臣の心にも、誰が歌といふことの詳ならざれど、讀み人知らずと題し、或は篁ともいひ、或は人麿とも云ふによりて、篁朝臣の歌の次に出るし、左歌は、或人の曰く、人麿がなり、といふことをも、記し添へられたるなるべし。そもそも、此の歌の篁朝臣のなることは、宇治大納言隆國卿の作られたる今昔物語第二十四、世俗の部に

小野篁被流隱岐國時讀和歌語第四十五

今昔小野篁ト云人有ケリ事有テ隱岐國ニ被流ケル時船ニ乘テ出立ツトテ京ニ知タル人ノ許ニ此ク讀テ遣ケル

ワタノハラヤソシマカケテコギ出ヌト
ヒトニハツケヨアマノツリフネ

ト明石ト云所ニ行テ其夜宿テ九月許リノ事也ケレハ明晨ニ不被寢テ詠メ居タルニ船ノ行クカ島隱レ爲ルヲ見テ哀レト思テ此ナム讀ケル

ホノボノトアカシノウラノアサキリニ
島カクレ行舟ヲシソオモフ

ト云テソ泣ケル此レハ篁カ返テ語ルヲ聞テ語リ傳ヘタルトヤ

(本文は丹鶴叢書所收の本に據る)と、ありて動くまじくこそ、はた、調も人麿朝臣の時代に作られたる歌にあらざること論なきをや。もし、いにしへの歌調を知らまく欲せば、紀記萬葉を讀み味ふべし。紀記萬葉をよく讀みあきらめなば、調の如何は、彼のおほゝしき霧はれて、大海原の波とほじろく、天つ日かげを仰くが如くならんかし



歸家日記（つゞき）

故人 井上通子 遺稿
堀田璋左右 寄贈

二十五日、いつも明方には東の風ふき侍るまゝ、舟出してんとて苫おしやり、帆柱立てゝ錨引あぐる音など、鳴神の落かゝると覺て、おどろ〳〵しくさわぎのゝじる、かくしてこぎ出るにやとおもへど、舟子どもともへにやゝたちて見をりて、風なほむかひぬ、かくては武庫までも得行きがたしとて、又錨卸して泊りぬ。一夜のほどだにあるを、終日かくてもあらんはいかにわびしからまし。古里にもこれをば知らで雲のけしき風の音づれにも心をくだき給ふらんなど思ひやりてながめふしぬ。

なには江や蘆のうらばに舟とめて
たよりの風をまつぞひさしき

身のうきを恨てもまた難波なる
あしのかりねの長からぬ世に

たま〳〵物のひまより見れば、こなたへ向きてくる舟どものま帆に吹せて心よげにてはや着ぬなりと喜びて帆を引おろすなど、うらやましく、我もいつか古郷の地にかく着きなまし。又遥かなる波の上なれば思ひかけぬ方の風など吹きたらば、此下にや落入つらんとそこはかとなき事ども、煩はしくいひ續くれば、益本はかくなれはしろ、其時來りぬれば思ひの外にかゝるせも有ける物をと、おほし喜ぶまですみやかに事なり侍るものを、さるゆゝしき事仰せらるゝを、舟子どもに聞せ侍らば、はらたちていみおそれ侍りなんとて、わ

らふ。げに六十四卦の變通さま〴〵なるも時といふ事ひとつをなん大事にし侍るときゝしかばなどいひなぐさむ。かくて又あすの曉を待見むといふ。いつしか明なんと思ひて、苫の隙よりみれど、曉かけて出る月影、うす雲りて浪にうつりぬるも、春の曙のゝ心地して、なほ心あらん人にみせばやとぞ思はるゝ。やゝよこ雲の棚引ころ、かなたこなたの舟ども何ときゝわかぬ事どもいひかはすめるは、すはや出ぬるならんと、かしらもたげたれど、益本ともに出て見きくに、なほ西の風のみ吹て、舟出す事叶ふまじとぞ、おの〳〵いふ、聲す。こはいかなるにかと心もくしはてゝ、おもへどすべきかたなし。けふも猶かくて暮すは。

二十六日、なり。夕つがたはるかにみえし山の端、雲おこりて海のうへやゝ暗くなり行と見るは、夕立のこなたに來れるなり。墨の如くなる雲、俄におろひ來りて、神なり光みちたる、たゞこの舟どもの上におぼえて、すさまじきけしきなれど舟どもをとらじととま引おはひもあへぬに、雨降出て、風ふきまぜ物の音も聞えわかず。浪もいとたかく打ろひて、舟の内にもりくるとまの雫、いとわびしさいはむ方なし。舟子どもも小舟に乘りて綱引なほし、錨おろして、ろこらどよみあへる、はやちといふ風ふき出なんやと、危がりいふ。舟もかなたこなたと漂ひめぐりて、しづ心なし。いぬのすぐる比、雨はれ風やみて、神もとほくさりぬ。いでやさま〴〵に世を渡るわざものゝ、やすからぬ中にも、かた時がほどに心を摧き、身を危くして、うきものは舟人なりとぞおもひしらるゝ。雲さり星見えて、更行まゝになほよく晴わたりぬ。すこしまどろみたるに、曉ちかく月も出ぬ。

浪まくらあかつきちかき山の端に
　　こゝろほろくもいづる月かげ

なにはがた風待ふねのかぢまくら

いくよあし間に浮ねしつらん

明行まゝに、例の舟出しつべきよろほひするを、又此度もいかゞなどおもふに、誠にこぎ出でぬるいとうれし。風も僅かに吹て、おもふさまにはあらざめれどあまり久しきにわびて、先武庫までとこゝろざして、出行、

吹き逆る難波のうらのおひかぜに
月も出しほのあけがたのふね

ひる過る頃、武庫につきぬ。風又かはれり、しばしこゝろみむとて。舟とめて追風まつ。申の時ばかり風よくなりぬとて、又こぎ出て行。北の風つよく吹て、帆は斜めになびきて、船も傾きながらとくはしり行、生田の森も此わたりにやとはまほし。

津の國のいく田の森にいまもなほ
とふ人ありやあきのはつかぜ

須磨明石を過ん時かならずをしふべしと、ともの女していはすれど、ほどなく須磨の浦といふ。かぜいとあらくふき出て浪も高し。

打らろふる浪の音にもしられけり
すまの浦かぜあきたちぬとは

ろこともわかぬまに、はやく明石にて侍らふといふに、おどろかれて。

いとはやも須磨のうら波打ち過て
あかしの沖にいづるふなびと

いと遙にみえしあはぢ島もいつしか後に成りぬ。

行ふねのほのかにみえしあはぢ島
せとの追かぜふきすぎにけり

瀬戸をすぐれど、きはもなくたゞへたる海のおもて、はるぐおそろしげにて、ひまなくたつ波いと高くうち重りて、日もくれかゝりぬ。ふねはともすれど打かへしくつがへるべく浮沈て、乘る人もたふれまろびなんとす。友舟もみなちりぐにふかれ行。

　　舟人もひねうちさわぐなみかせは
　　　ひゞきのなだに心してふけ

女はわがきぬのすそをとらへてよりふしぬ。

乘風一葉幾浮沈、　万疊奔波蒼海深、
這裏雖拐古賢欲、　無人岸上説無心

なほれなじさまにて、とぶか如くにすぎ行、暮はてゝ星の影、浪にうつりぬる玉のよるとぞみゆる、高砂といへどくらくて能も見えず。

　　波の音まつのひゞきも高砂の
　　　尾上のかねはきゝもわかたず

爰を過る頃、風すこしなぎて浪もやゝ靜になりぬ。とくゑしまにいたりなむとて、こぎ行、風かはりて西の方より吹出、舟ゑしまにも得行きつくまじといふをきゝて、益本も立出て見る。かしこにいとくろう見ゆるは、何ぞととふに、舟の泊りたるにやといふ聲す。ちかくなるまゝに、みて舟にはあらず、小さき嶋なり、かみ嶋とぞいふ。此かげにしむし風しづめてといひて錨おろして、舟をとゞむ。例は舟いるべきみなとにしもあらねど、なほ漂ひやまず、とかり有て風、又北になりぬとて喜びてこぎ出す。明方ちかく繪嶋にいたりぬ。

　　松が枝のみどりを浪にうつしてや
　　　繪嶋がいろの名をとゞむらん

二十八日、斯て夜も明ぬ。風は何方よりもふかで、帆もむとくなれどとて、引おろして、こぎ行、やうやく室津にいたりて、汐むかひぬれど、しばし止る、昨日は一ときが間に、あまたの所を吹過ぬるを、けふは追風もなければ一里ばかり行もあるかぎり力を出して櫓を押す也、揖保の郡網干といふ所も、我國の君領じさせ給ふ地也、その前なる海をもれし渡る。くれ行程に汐よく成ぬ。追風の吹なば只一わたりのほどにわが國につきなん物をと、いへどたゞなぎになぎて靜まれど

ありとあるをのこども櫓を取て歌うたひつゝ、よもすがらこぎ行。明つき近くなるまゝに、又引汐になりぬといふ。舟はこぐ方にはゆかで流にひかれてしぞくやうなれど、力を盡してもふようなり。爰に船繋ぎてんといふ、大きなる舟の右のかたにこぎくるより、こなたの船にいふやう、船つなぎ給はゞ我もこゝにとまりなん。あかつきに出給ふをりは、さきぐ\こぎ給へといふ心得さぶらうとて、かなたこなた錨をおろす音して、しづまりぬ。いづくの誰としらぬものゝ、たがひにかくいひあへるも、なさけ有とればゆ。

二十九日、夜明てみれど、牛窓なりといふ。

　世をわたる身を牛窓の明くれを
　　こぎ行く舟のうへにてや見む

けふはいとゝくさぬきにつきなんといへど、なほ同じさまにて、風なかりしかど棹もやすめずこがれ行、さころいへ、近づきゆくまゝもとみし方の山どもかずぐ\見えて、いとうれし。備前の國にゆく舟路なりといふかたもみゆ。沙彌島、鹽飽嶋などろのかみ朝夕に聞し所ども、いまぞ目にちかく、左右に見る君の御城山の間より、はるかにさし出たるみどりの松、白き壁さやかにて、九年を隔て、今またあふぎ見るめづらしく嬉しさたとふべき物なし。ろこのほどぞ我親の住家ならむと、益本と共に見て歡び、はや岸に着なんとれもふに、又汐のみつるほどを待とて、眞しまの嶋かげに、舟とめてゆふべを待ほど千とせをすごすこゝちす。いつしか父母妹などに逢みんほどいかならんと心ときめきして、なにもぐ\思ひわかれざるまゝ、硯もとりやりてはらから共にとくつきなん事をのみいふ。

（をはり）

夫婦の禮

故人　仲丈敬甫

夫婦の中は、心ゆるびて、なれ合ひ易き物なれど、常に禮儀をとりもちて、わするゝ事なかるべし。およそ、心をつゝしみ、かたちをうや〳〵しくする事は、私欲のよこしまを防ぎて、わが明德をまもりわかむる道なり。故にこれをまもれど、さいはひをうけ、これをすつれど禍をかうぶる。いにしへ、晋の郤成子、いまだ賤しくてありけるとき、田にいでゝ草ぎりけるに、その妻、かれいを送りて、夫婦の禮、うや〳〵しきこと、賓客の相向へるが如し、これをその國の大夫なにがしの見て、めでたく思ひけれど、ともにいざなひかへり、君に申して高官にすゝめける。又五代の時、長從管といふもの許州といふ處に、とみたるものゝ玉の帶もてるをもとむれども、與へず、從管、しのび武者ふたりつかはして、かの家に入り、あるじを殺して、帶とり來れと云ひけれど、武者ども、ゆきて、夜、しのび入りて見けるに、夫婦、ねやの内に向ひ居て、賓客の如く、うや〳〵しかりけるを、いと深くめでゝ、此人を殺さど、やがて、我身に酬はむとおもひけれど、をどり出でゝ、事のよしを知らせ、はや〳〵此たからをまゐらすべしと云ひて、事なしに取りてかへりけるとかや。

栗園翁の女教論

貫　堂　子

栗園中村氏は、江州水口の老儒にして、學問、文章ともに、世にすぐれたる人にてありしが、明治十四年の頃七十余歳にて病歿したり。栗園翁かくて感ずる所やありけん、女教を論じて、女子には書を讀ましむべからずとの意を述べたり、その言の出づる所以を察するに必激する所ありしによる者の如く、吾輩をして、全く同感を表せしむることを得ざる所もあり、且又、既に、南摩羽峯老人の評語さへあれど、其の論の當否は

見ん人、自、了得する所あるべし。

たゞ、吾輩の患ふる所のものは、世間、いまた、全く栗園翁の論ずる所の如きものなしといふことを得ざること是なり。此の論の出づるものは、必之が爲ならんのみ。世の老學大儒をして、かゝる感慨を起さしむるもの果して女學者より出づることあらむ、その害、その弊、まことに大なり、ふかく愼みいましめざるべからず。

いま、試にその全文を左にしるさん。この文、もと、漢文なれど、一たびは之を譯せんと思ひしかど、女子とて、漢文を讀まざるに非ざれど、その習熟の一助ともなるべしと思ひかへして、そのまゝをかゝげぬ。

不可使女子讀書論

女子嫁而生子、有撫育敎訓、達才成器之責、故女子之不可不讀書、急於男子矣、此說蓋出乎西洋人之口、朝廷用其說、開女黌、置敎師、俾童女年六歳至笄入塾受業焉、時人皆以爲開化、余竊謂此事在西洋女子、則得失未可知也、至我邦女子、則不獨無益、反有貽害焉者、何耶、大低女子、智慮編淺、局量易滿、苟讀書識字、勢必生驕慢之心、誇曰吾非曹大家謝道韞後身、則紫式部清少納言之流亞矣、作艶詩浮文、以爲淫奔之囮者有之、自標太高、迨吉不肯嫁、以處女終其身者、有之、纖手所弄唯彤管之煒、至于裁縫刺繡蠶織紡績等事、視以爲細故、不屑爲之、廢居室之大倫、以亂敗風俗、是有女子之名、而無女子之實矣、一妖物也、其中或適人、不能婉娩聽從、以事舅姑、不天其所天者、而蔑視之、女子讀書、其貽害大低如此、可勝嘆哉、若夫讀書恪守女範、能事舅姑、從所天之命、訓誨其子、以爲俊士端人者、求之和漢、非無其人、然千百中一二、自非賢女、焉能至於此也、昭陽龜井先生、使其女小琹讀書、比長學力富贍、氣象磊落、而睫底無復男子、後先生噬臍、是余所覩聞也、古處原翁女采蘋、亦好讀書、漫游四方、以才藻噪于時、而頗有醜聲、其他可以類推、余深惡女子讀書、故余門無女弟子矣、余雖有一女一孫、所習者惟女紅、决不使讀書、恐其變爲妖物也、易云、無攸遂在中饋貞吉、詩云、載弄之瓦、無非無儀、無父母詒

羅、孟母曰、婦人之禮、精五飯、冪酒漿、養舅姑、縫衣裳、皆敎之勤卑事、習勞苦耳、未嘗聞有使讀書之訓也、然則婦人不敎子乎、曰否、生女敎以女紅、男則擇良師而託焉、雖然女而不識字、亦爲不便、不有平假名字者乎、使其習之足矣、何必使之讀書是爲乎、

南摩羽峯先生の評に曰はく、諺曰云々、其然、豈其然、本邦學校、敎女子、亦有女紅事、何必讀書一事、

又曰、是偶不善讀書者之弊、不可以律海内女子、

又曰、世或有嗜甘味者、或有好辛味者、是以細腰大額、與三平二滿、皆鮮有不得其配者、固不能齊一之也、亦未必齊一之也、如此篇論女子讀書之弊、痛快激切、至矣盡矣、然是亦老先生之所嗜、而非余之所好也、

江馬天江先生の評に亦曰はく、造化生物千差萬別自有靈蠢之異、既有靈蠢、不能無尊卑、人靈而畜蠢、男尊而女卑、理之尤易知者、倘不問靈蠢尊卑、而惟以造化生々之德論之則人與畜不二、而男女牝牡雌雄、亦一焉耳、於是乎男女同權之說起、而婦人抹却柔順二字、又君臣父子同權之說起、而君子抹却忠孝二字、竟至奴視楠公、名敎墜地、倫常滅滅、妄說之流毒不亦甚乎、蓋男女同權、齊其尊卑、故亦不異其敎、於是鑄出許多驕慢女子、所以先生之不得已於言也、

諸先生の評語は、皆、各、見る所ありて、必しも一ならざれども、その弊害とする所のものは、皆、驕慢無禮の不德を指すにあらざるはなし。されど、輕薄の行は、至りて微細といへども、必、大人先生の排斥を免る、ことを得ず、況、その大なるものに於いてをや、世人よく此等の文辭を味ふものあらむ必、思半にすぐることあらん。

百人一首について

小青淹主人

定家卿の選と傳ふる小倉百人一首は、百首の中戀歌に屬するもの四十六首、ほとんどその半ばに居る。數年前、西村茂樹翁、悉く之を删り去り、新に五十首を加

へ、名づけて新撰百人一首といへり。戀歌四十六首のところ、五十首を加へられたるを見れば、その中の四首は戀歌にあらざるものを省かれたること明けし。即ち左の四首を省かれたるなり。

ちぎりおきしさせもがつゆを命にて
　あはれことしの秋もいぬめり

ちぎりおくとあれど、こはたゞの約束にて、戀歌にはあらず、心も調もいとあはれなり。さるに之に代ふるに同じ基俊卿の作なる

みよしのゝ山井のつらゝ結べばや
　花のしたひもおそくとくらむ

を以てし、又左京太夫の作なる

秋かぜにたなびく雲のたえまより
　もれいづる月の影のさやけさ

に代ふるに、寂然法師の

さらぬだにおもきがうへの小夜衣
　我つまならぬつまなかさねそ

を以てせり、後鳥羽院御製

人もをし人もうらめしあぢきなく
　世を思ふゆゑに物おもふ身は

に代へまつるに、

あさひさすみもすそ川の春のそら
　のどかなるべき世の景色かな

又、順徳院御製

もゝしきや古き軒端のしのぶにも
　なほ餘りあるむかしなりけり

に代へまつるに、

玉しまや川瀬のなみのおとはして
　かすみにうかぶ春のつきかげ

四首をかへられたるは如何にぞや。新に加られたる中にて、

人の親のこゝろは闇にあらねども

子をおもふ道に迷ひぬるかな

さゞなみや志賀の都はあれにしを
　むかしながらの山ざくらかな

たらちねは斯れとてしもぬば玉の
　我かくろ髮をなでずやありけむ

見わたせば柳さくらをこきまぜて
　みやこぞ春のにしきなりける

などは、いとめでたし。戀歌の中には人倫をそこなふものもあれど。戀歌はもと人の至情に發するものにして、必ずしも渾てみな淫靡なりと斷言すべからず。

かぜふけばおきつ白波たつたやま
　夜半にや君がひとりこゆらむ

夫をおもふ妻の至情にあらずや。百人一首の中にても、

あらざらむ此の世の外の思ひ出に
　いまひと度のあふよしもがな

わすらるゝ身をば思はず誓ひてし
　人のいのちの惜くもあるかな

戀歌なれども淫靡の意なく、女子の至情言葉の外にあふるゝものを、火を見れば火事と心得る如く、戀歌はすべて世道に害ありといはるゝは、うべかひがたくや。

おきの玉藻

永石薰風

ふるきものなりとて一すぢにすつべきにあらず、あたらしきものなりとてむげにいやしむべきにもあらず。ふるきものを見ては、ありしむかしのありさまをしり。あたらしきものを見聞きゝては、今の世の目のあたりのすがたをさとるべし。たゞ古にのみなづみて、今の世の勢にうとく、あるは今の世のことにのみはしりて、古へのことをしらざるは、二つながらかたよりて、いとおぼつかなく、あやふきわざ

なり。世界にたぐひなき大君をいたゞき奉り、二つなきめでたき國にうまれ出でゝ、なほいやが上に知識をみがきわざをねり一すぢにつかへまつりつゝ、國をとまし家をおこし、國の光をかゞやかし、うづもれたる美風をあきらめおこして、外國にはてるは、今こゝにまのあたりある人のつとめなるべし。れよろ世界に國はおほし、洋の西東南北とれのも〱人の種ことなれど、したがひて手ぶりをことにし、かたみにわとらじときはひあへり。わが國の人はわが國のことを知らでやはあるべき。わが國の光はわが國の人かゞやかさゞるべからず、まづわが國のことをしりて後に人の國の上をゞうかゞふべし。れのれ昔今の書をくりかへしよみふけるはどにことにをかしとればねたる、あるはいましめともなり、あるはろのかみのさまをしるにたすけとなるべきことぞも、さては何くれとぬき出たるが中に、こゝには更に女にかゝはれことをのみひき出でつるになん。さてぬきいでつる書の名、ものせし人の名をもかゝげ、をり〱は短評をもこゝろみつ。

○　○　○　○　○

小兒のしつけかた

小兒の時より、早く父母兄長につかへ、賓客に對して禮をつとめ、讀書手習ひ、藝能を勸め學びて、あしき方にうつるべきいとまなく、苦勞さすべし。はかなき遊びに隙をつひやさしめて、習はし惡敷すべからず。衣服、飲食、器物、居所、僕從、に至る迄、其家のくらゐよりまとしくはうろくにして、もてなし薄く、心儘ならざるがよし。いとけなき時、艱難にならへど、年たけて難苦にたへやすく、忠孝の勤めをくるしまず、病すくなく、驕なくして、放逸ならず。能家をたもちて、一生の間の幸となり、後の樂み多し。もしも不意の變にあひ、貧窮にいたり、或は戰場に出ても、

身の苦しみなし。かくの如く、子を育るは、誠によく子を愛するなり。又幼少よりやしなひゆたかにしてもてなし厚く、心儘にして安樂なれど、おごりにならひ、私慾多くして、病多く、艱難にたへず。父母に仕へ、君かつかふるに、勤をくるしみて、忠孝も行ひがたく、學文、藝能のつとめ、成難し。もし變にあへど、苦しみにたへず、陣中に久敷居ては、艱苦をこらへがたくして、病を受、戰場に望みては、心に武勇ありても、其身やはらかにして、世の戰ひのはげしき働なりがたく人にをくれて、功名をもなし難し、又男子只壹人あらば、極めて愛重すべし、愛重する道は、をしへいましめて、其子に苦勞をさせて、後の爲よく無病にて、わざはひなきやうにはかるべし。姑息の愛をなして、其子をそこなふは、誠の愛を知らざるなり。凡人は若き時、艱難苦勞をして、忠孝をつとめ、學問をはげまし、藝能を學ぶべし。かくのごとくすれば、必人に增りて、名を上げ身を立て、後の樂しみ多し。若き時安樂になすな事なく、艱苦をへざれば、後年に至りて、人に及ばず、又後の樂みなし。

こは貝原益軒翁がものせられし兩葉支鑑といふもにみえたり。この書は翁が八十餘の齡をかさねたる老後のすさびに成れる書なり。わが見しは、寫本にて假字のあやまりなどいとおはかりしを、今こゝにはをぎなひあらためつ。

教育の法もそなはり、衞生のわざもいとよくとゝのほりたる今より見れば、めづらしげなきが如くなれども、そのかみにはやくかゝる論をいひはりしは卓見といふべし。

今も年十四五にもたらぬ小童のまき煙草などくゆらかしつゝ、ほこりがほにありくめるは、父母のいましめのたらぬにやあらん。兵役をいとふあまりにわが子の身の丈のひくからん事をねがふ親のあめるは

如何にぞや。

○　○　○　○　○　○

父母和らかにして、子を愛し過せバ、子おこたりて、父母をあなどり、つゝしまずして、行義あしく、氣つゐにして、身の行ひあしく道に背く。父たるもの威ありておそるべく、行義有て、手本になるべけれバ子たるもの恐れつゝしみて、行義正敷、孝を勤る故に、父子和睦す、子の賢不肖多は父母のえわざなり。父母ゆるがせにして。子のあしきをゆるせバ、惡を長ぜしめ不義に落いる是子を愛するにあらずして、かへりて子をそこなふなり。子を育るに幼きよりよく敎へいましめても、惡敷は誠の天性の惡敷なり、世人多くは愛に過て、おごらしめ、惡をいましめざる故ならひて、性となりつひに不肖の子と成もの多し。世に上智と下愚とはまれなり、上智はをしへずして、よく、下愚はをしへても改めがたしといへども、惡を制すれバ面は改まる、世に多きは中人なり、中人の性は敎れバ、善人となり、をしへざれバ、不善人となる。故に敎へなくんばあるべからず。

これもおなじく兩葉支鑑なり。論ひきくたひらかにして廣く世の弊にあたれり。よく味ふべし。わが子のほしいまゝなるにまかせ、あるはみだりにそがいふ言葉を信じて、子に迷ふものすくなからず。わが家にめしつかへる婢僕などをバ、犬馬の如くにもてなし、わがまゝにふるまふなど、兒童の上などには、はばかるわざなり。いさゝかのことながら、かたくいましむべし。婢僕とて人なり、わが同胞なり、はた皇國の御民にあらずや。

○　○　○　○　○

二位尼政子のこと

去る建久四年、五月十六日、賴朝卿、富士野の御狩に若君賴家、十二歲にて始て鹿を射させ給ふ。將軍御自愛の餘り、梶原平二左衛門景高を鎌倉へ遣はされ、

御臺所へ賀し申させ給ふ。景高馳參じて女房を以て、申入るの處に、思の外御感に不ㇾ及、武將の嫡子として、野原の鹿鳥を獲たる事、强希なりとするに不ㇾ足、楚忽の御使頗其煩あるかと云、景高還て面目を失ひ、富士野に歸參して、此趣を申すとなり。此詞を聞て按ずるに、世上なみ〳〵の女性にあらざるか。東鑑集要にみえたり。將軍とは賴朝をいふなり。御臺所とは政子をさせり。云云といふまでは東鑑の文なり。以下は集要の評語なり實にこそ。『東鑑』は治承のはしめ賴朝のおこりしより、鎌倉幕府の末まで、八十三年ばかりが程の鎌倉にての日記なり。作者は誰とも知るべからず。

❀　❀　❀　❀　❀

文治二年、四月八日、若宮の廻廊にて、二品、御臺所、靜か舞を御覽あり。其時靜、先歌を吟じて曰、

よしの山峰のしらゆきふみわけて
　いりにし人のあとぞこひしき

次に別曲を歌ふの後又和歌を吟ず。

しづや賤しづか緒手卷くりかへし
　むかしを今になすよしもがな

二品是を聞しめ給ひ、八幡宮の寶前に於て、藝を施す時は、先關東の萬歲をこそ祝ふべき事なるに、上聞をも不ㇾ憚、叛逆の義經を慕ひ、別曲を歌ふ事奇恠なりとの御氣色あり、時に御臺所、仰に曰、君流人として、豆州にましますころ、吾に芳契あり、しかれども北條殿時を怖れて、ひそかに是を引籠らる、吾猶君に和順して雨を凌、夜に迷ひ、君の處に到れども、石橋山の軍には、獨伊豆の峯に殘されて、君の生死は知奉らず、日夜の思ひいくばくぞや。其愁を論ずれど、今の靜が心の如し。若も多年の好を忘れて、豫州の君を慕はずんば、是豈貞女の姿と云んや。外に形はるゝ風情を寄て中にうごく露膽を謝す。尤幽玄と謂つべし。

枉て賞翫し給ふべし、となり。是を聞召て、二品御憤を休らる。少時して卯の華重の御衣を簾中より押出し、静に給ふと云々。嗟々貞節の婦徳、千歳の感涙をさへかたきものにや。

おなじく集要にあり。二品とは頼朝をいひ、若宮とは鎌倉八幡宮なり。關東とは鎌倉幕府をいへど、やがて頼朝のわが上をいへるなり。豫州は義經なり、さてこの静の二うたはふるきものに見えたるをいさゝかかへたるのみなれど、後の人のなきことを、ありしごとく作れりしなりといふ説もあれども、いかゞあらん。こはふるき歌のわが身の上によくかなへれど、静の今おもひいでゝ、いさゝか詞をかへて、うたひあげしなるべし。今この一節をよむにつけても、其かみのありさまみゆるが如く、静か心のうごひいかにせちなりけん。おもひやるだにあはれなり。政子の心おきて感ずべし。

静の墓

静女の墓は、北葛飾郡、伊坂村、字寶侍戸にあり。土人の説によるに、墳上に老杉一樹あり、高五丈、圍二丈餘にして、静女歿する時に、植ゑし墓標なりと云傳へ、近年立枯れとなりしを、里人に燒かる。焦爛の餘材は里人の堀取りて去れるが、其墳上は、自ら二つに分れ、其一方に石碑ありて、静女之墳の四字を刻す、享保三年、中川忠英（飛驒守）の建る所と云ふ。外に俳句の碑一基あり。又静女を吊ふの意を寓す、相傳ふ、昔源豫州、陸奥に遁走りし後、静女跡を慕ひて、鎌倉より下總國、葛飾郡、下逸見（下逸見に静回し思案橋等の古蹟あり）と云ふ所まで、往きたるに、豫州は既に討れしと聞きて、彼所より立戻りしが、俄に病歿して、玆に葬ると云ふ。又栗橋の北岸なる、中田宿（下總國）光了寺（眞宗）は元同郡（今北葛飾郡）、高柳村にありて、（此寺は眞言天台兩宗にて高柳寺と稱し高柳郷の内にありしが延保年中親鸞親人に歸依して改宗し高柳光了の

（二晉田近きを以て今の寺號に改め中田宿へ移れり北際は伊坂村も亦高柳鄉の內にありしと云ふ）靜女香花の所たり。今同寺に靜女の舞衣一襲（後鳥羽帝より賜ふ所と云ふ）、護身及一口鐙一雙あり、鐙は豫州の遺物なりと云ふ。然るに靜女の末路の事は、書史の徵すべきなし。故に姑く寺傳に從ふ。

好古叢誌といふもの丶第二卷にあり、この文は佐藤弘毅といへる人のものせらしなり。

靜女の墓の追考

佐藤一齋翁の、日光山行記に、栗橋驛、有二關津一、是爲二武總界一、關南伊阪村、有二靜女墓一、老杉輪囷、大七抱、高可二九仞一、枝條旁午蟠蟠、中身科空、試鉛二其根一、嗅レ之氣烈、蓋、六百年外物、既航レ渡爲二中田驛一、驛北光了寺、即靜女香花處、舞衣一領、護身一口、馬鐙一雙、舞衣紺色綸二肩背一、繡二日月七星、蓬萊雲鶴一、傳爲二後鳥羽帝所一レ賜、不レ審二然否一、刀銹澁甚、鐙刻二全木一爲レ之材類レ㮨、蓋、稱二武藏鐙一者、傳以爲二源豫州物一、可レ疑、寺舊在二伊阪村一、後徙二於此一、とあり。青山春夢翁の櫻史新編にも、またこれをひきて、下野野澤村、有二大櫻樹一、分爲二雙幹一、其一著レ花單瓣、其一乃千葉、每歲迭變、土人呼曰二靜櫻一、傳爲二源廷尉妾靜手植一（下野風土記）靜墓在二下總伊阪村一、（翌日櫻文）其植二櫻下野一亦有レ以也、とあり。附記して、以て參考に備ふ。

編者おもへらく、靜女の墓といふもの、既く牛馬間といふ隨筆にも、淡路國に古墳ありて、牛飼の男に託りて云々し扇をひたひにあて、えむし案じて歌よみせし事、見ねろの國にも、古く同じほどの傳へありといふ。小杉榲邨君云、阿波國に、靜が母磯前司の生れし所といふ傳ありて、ここにも靜女の舊蹟何くれといひはやせりとぞ。今かの實地は何國ならんか知るべからねど、この阿波淡路などの傳へは、安土本義經記といふものあり。其文中靜の事蹟を書つらねて、傳曰少納言入道信西は、今樣舞の上手にて、

母の前司に敎へて舞せたり。靜其藝を習ひたるに、母にも勝れたり。殊に容貌も婉姝にして心緒優なりとにや、元暦元年六月、初て義經に奉公す、前司は阿波國磯と云所の者なれど、磯の前司と云へり。今は其所を磯崎と云ふ、靜は淡路の志津賀と云所にて出生したる故に、名とす。今は其所の者志津木と云へり。又丹後國磯村と云所に靜の塔あり。磯崎は板野郡撫養と云郷の内にて鳴門の近所なり志津木は津名郡にして今も一部落をなせる所なり但しシヅキは古き郷名にて式内志筑神社もありされはシヅカをあやまりてシヅキと呼ぶにはあらずなど見ゑたるに據れは、無稽の謬傳にもあらざるべけれど、なほ丹後國にも、塔ありげにいへるなどみな、かの靜の行方さだかならぬ傳へよりいひ出せるものならむか、因みに注きそへて參考の料とす。（好古叢誌第二卷）

下總なるが信なるべくや。牛馬問の文は後にかゝくべくなん。

餅をかちんと云ふ事に就きて

鹽井ふく子

今は女子たち大方餅の事をかちんと稱ふれど、古へは內裡のみにて稱へしよしなり。そは、內裡の未だ微々たりしころ、ある男、小豆餅を箱に入れて、築地の邊を賣りありきけるに、女房達、此の男の褐色の袴をつけ居りしを見て、その人をかち〳〵と呼びしより、遂に其物の名となりて、それより漸くに傳はり〳〵て、何處にも餅の事をかちんと稱ふるやうになりたりとか、また或說には昔は必ず歌の會に餅を出して、勝劣の賞にわたへし故に、餅のことを歌賃とゝなふるなりなどいへり。何れが誠なるか、遠きむかしのことなれど、明かに分くるによしなけれど、そうじて、古へは、歌の會には餅を出しゝなりと云ふ。夫れに就きて、いとおもしろき話あり。むかし細川幽齋といふ歌人の門人に、丹洲福知山の城主なりける小野木縫殿助言卿

といふ人ありけり。其人若き時より和歌を好めり。歌に志あるものを妻と定めむとて色々求めけるに、をりふし吉田織部正の妹、歌に志厚きよし申て、人の媒するに。まかせて、其人をは妻となしぬ。縫殿其の折は。いまだ小身にて。貧窮いはむかたなし。されど、なほ熱心なるまゝに、歌の會を催しぬ。其時に來りつどひし人々は、小川土佐守熊谷大膳亮、宇田下野守、木村宗八郎等なり。座定まりてかたへを見けるに、翠簾の掛りたる所ありて、さも雲の上めきたるに人々不審におもひけるに、主人縫殿の云ふやう、愚妻こども御會に連り申度よし、申すに付、かくのごとくしつらへて、翠簾の内に罷りありぬ。あはれ、御連中に加へさせ給はれかしと申しける。程なく歌はじまりて、食事のころになりけるに年の頃四十ばかりのきたなげなる女、翠簾の外に手をつかへて、今日の御客來への饗應に奉るべき品をと問ふに、妻女とりあへず、短冊に歌を書きて出だされたり。折ふし春雨の降りけれど、

月さへも漏るやどなれど春雨の
　ふるまふものもなかりけるかな

やゝありて、黒く燒きこがしたる餅を、反古につゝみ、杉楊枝を添へて出しけるに、つどひし人々皆その古風にして道に志深きを感じ、いたく譽めそやして飽くまでもたうべて歸りたりといふ。いとみやびたるわざなりや。

筆のすさび（四）

たけを

筒のひゞき

是の一篇は、さきに征清軍より凱旋したる親友の物語の一端を書き綴りしものなり。もとより拙き筆のすさび、其の實况の百分

の一だに寫し取ることを得ざれど、たゞ後の紀念にもとてなむ。

忘れもやらぬ去年十月二十五日、我が征清軍が初めて清國に打ち入りて、虎山の敵兵を蹈みちらしたる日なりけり。虎山總攻擊の部署は、はやく定められぬ。我が第三師團はこの日の曉深く立ちこむる霧に紛れ、苦もなく鴨綠江をおし渡りて、眞すぐに虎山に向ひたり。其の先鋒隊として眞先に進みたるは、我が第六中隊なる二個小隊なりけり。山を越え谷を渡り、草を分け岩根ふみさき進む中、とある山にさしかゝりぬ。頂に登りつめてふと彼方の麓を見下せば、こはいかに、清兵およそ五千ばかり、すきまも無くひし／＼と詰め寄せたり。かねて覺悟はしたれども、思ひもかけぬ敵勢に、あなやと胸とゞろかすひまもなく、決死…の號令は下りぬ。すは決死ぞ。覺悟せよ。耻さらすなと勵まし合ひつゝ身を挮へつ。戰雲俄に急にして忽すさまじき嵐は吹きおちむとす。いで命のあらむ限り、丸のつゞかむうちはと片唾をのみてうかゞふ中またしも下る烈しき號令、退却。背囊捨て……さては目に餘る大敵この小勢にて突きかゝらむこと、到底利なしとや。今更チャン／＼兵に後を見することと口惜しとは思へど上官の命いかでか猶豫せらるべき、あはつるな、後るゝな、あやまちすなと互に勵し互に戒め引き退く後より、惡くや、無念や、こゝぞとつけ入る豚尾軍、筒口そろへて一度に打ち出す丸は、雨霰、とゞろく響は百雷の一時におちかゝる如く、山も裂け谷も崩れむとす。あはれ退却の時ばかり口惜しく哀しき事またと世にあらじ。雨と降る丸、雲と立つ煙の中をくゞりつゝ退く折柄、飛び來る丸は我が側なる一人を打ち倒しつ。これはと胸をどらす間もなく、又一人は眉打ち破られぬ。一人は手うちぬかれぬ。殘念無念とさけぶ聲いとすさまし。ふみ留りて懇にいたはらむか、危急の場合其の

暇なし。さりとて生死を共にと誓ひたる戰友の今目の前に血しほに染みて呻けるを見ては、いかでうち捨て置かるべき、我は身の危さもうち忘れ、つとかけよりぬ。辛くして血どめの藥を與へつ。手早く其の身に纏へるものどもかなぐり捨て、御方に向けて走らせやる間も、絶えず飛び來る丸の音すさまし。いで我もと立ち上れど後れたりや。勝ちほこりたる敵の左翼ははや深く進み來りて、身は取り圍まれぬ。走らむとすれど足思ふに任せず。かけらむとすれど翼なし。さりとて猶豫せど無念、敵の手にぞれちむ。あゝ如何にせむ。ふと見る彼方に生ひ繁る一木の蔭をたよりに、かけつけど、天か、命か、木蔭にすこし掘れたる穴あり、卑怯と笑はゞ笑へ、譏らば譏れ、其まゝ其處に身を隱しつ。とゞろく胸の中にも先、祈り奉るは大御神。さるにても敵はまさしく我が姿を見とめしならむ。やがて此所にたづね來べし。來らば必定其のいまはしき刄にきざまれむ。さらずば捕はれていき恥さらさむ。思へば口惜し。くやし。よし身の恥とくるしみとは忍ぶとも、斯くては日本軍人の名譽をいかにせむ。ふる里にます父君母君さては里人に對して何の面目あるべき。申すもかしこけれど大元帥陛下に向ひ奉りて何の申譯あらむ。せめてはみづから潔き死をとげて我が本分を盡さむ。さなり〱と心を定め筒口喉に押し當てかけ、金に足の指うちかけたる心の中は、知る人知らむ。

是よりさき、傳令騎は飛びて先鋒隊の急を本隊に報じつ。進め〱の號令の下に、あまたの援兵隊は繰り出されぬ。惡き穢き豚尾軍、いで一ひしぎにひしぎくれむと、はやり立ちたる我が軍は、虎の怒れる如く、獅子の荒れたる如く、勢鋭く突き進みぬ。もとよりかよわき豚尾兵、いかでこの勢に敵すべき。朝日にあひたる梟の如く、あはてまどひてはや足もとはしどろもどろ。

すはと云はゞ、打ちて倒れむと、穴の中にはかなく死を待ち居たる我は、わたり俄に躁しく、數多人の寄せ來るけはひに、すはこそとかけ金にかけたるをゆびに力をこめつゝ、ふと見渡せば思ひきや、寄せ來る人衆は我がなつかしくたのもしき軍隊ならむとは、あまりの嬉しさに、我をも忘れ、ものも云はず躍り上りて、その中にとび入りぬ。

かくて我が軍は、崩るゝ敵軍を追ひかけ追ひつめ、進むをりから、遥に虎山のかたに煙の白雲うづまき上り、大筒小筒の音すさまじく聞ゆ。かねて江の上流を渡りて、敵の背後にまはりたる佐藤大佐の一隊、今しも敵を襲ひて戰を始めたるなるべし。すは時こそ來たれと、ます〳〵勇む我が軍は、前後に大敵ひきうけて、いよ〳〵崩れたつ敵軍めがけて突き入りぬ。天も破れむ筒の響き地も碎けむ鬨の聲の中に、血しほの河を流し、屍の山を築きつゝ、しばしは修羅の巷を現ぜしが、我が軍の向ふところ、金城も破れざらむや、鐵壁も碎けざらむや、と見ればはや日章旗は虎山の敵壘高くひら〳〵と飜りぬ。

あはれ、明治二十七年十月二十五日は、我が征淸軍の一大紀念日となりぬ。この月この日は、我が爲にまたいと哀しきいと喜ばしき紀念日とぞなりにける。

靖國神社の祭

塩くむ翁

いくさに生きのこりたるものは、胸に勳章といふものなどかけて、世にときめけど、鋒鏑の間に倒れたるものは、むなしく砂礫にさらされ、無定川のほとりの骨、なほ春閨夢裡の人とやならむ。あはれ、死にたるも、生き殘りたるも、ともに國の爲にたゝかひたるなり。忠義の心に二つあるべからず。されば、遺族にあつく物たまひ、魂さへ公けに祭らるゝこそげに大御世

のめぐみなりけれ。
靖國神社はやがて戊辰以來王事に仆れたるものをまつ



れるなり。こたびのいくさに、もろしに死にたる人も、

また此に祭られむとすらむ。げにや、聖恩骨枯に及ぶとやいはまし。

千代田の宮の北、九段坂の上に、宮柱ふとしきたて、ひぎ高知れる神のみあらか、仰ぎまつるも、いとたふとし。そのかみのいさをしを思へぞ、賤が身のたらたへの袖もくちぬるばかりになむ。やしろの境内、いとひろし。遊就館には軍器、分捕物など備へおきて人の看るに供へ、馬場の中には、大村益次郎の銅像高く空にたてり。金の燈籠のうるはしき、銅の鳥居のいかめしき、さては、植ゑつらねたる樹の花の、春風にほころびて、大和心の色ににほふも、處から、いとあはれなり。祭は年に二度、五月と十一月とにあり。五日にはじまりて、七日に終る。かたじけなくも、うちより、まつりの使たまはり、あけがたより、海陸の將校士卒列をなして、つぎ〳〵に社の前にをがむ。號

令一聲、喇叭の音澄みて、劍華日に映じ、のる馬のあがきも、いといさましげなり。

軍旗翩翻として高く風に舞ひ、樂隊のかなづる音樂のふし、瀏喨として空ゆく雲もとゞめつべし。子を失ひたる女、さては親を失ひたる子などの、まうで來て、御世のめぐみの露に、袂ぬらすは、いふも更なり、貴きとなく、賤しきとなく、都の士女、あつまりつどひて、綾羅のたもと相つらなり、伽羅のかをり空をかすめ、れうさくるさに路もふさがりて雜沓するさま、錐をたつる地なしと云はんもわろかなり。

四十路ばかりの女の、髮を切り下げにしたるは、後家なるべし。十歳ばかりなる男の子をひきつゝ、やしろをふしをがみて、いましの父も御國の爲に討死して、こゝにまつられたるなり。御國の男子はかくこそあらまほしけれ。いましも、なき父の志つぎて、御國守る軍人となり、事あるときは、軍にさきがけて、朽ちぬ譽れを後の世にとゞむべしとさとす心のそこもくまれて、いと殊勝なり。

亡きたまをなぐさめむわざとて、相撲、競馬、能樂など、日をかへて行ふ。力士がしこふみて、土俵の上に力くらぶるさま、見る人をして手に汗をにぎらしめ、古の相撲の節會のさまもかくやと思はれて、いといさまし。能樂も室町の昔しのばれて、いとをかし。くらべ馬はたいさましくも、をかしくも、佐々木、梶原のむかしをまのあたり見る心地しぬるも、また戰死せし忠義の士のたまものなりけり。

九段坂の上より馬場の南にかけて、見せもの、からくり、のぞき、豆藏、手品師など、たちならびて客をよぶ聲、いとかしがまし。いざ御らうじろ、丹波の國にて生捕りたる大蛇の、身のまはり二尺、長さ五間、見料はわづか五厘などゝのゝしりわめくもあれば、機械の龜の子めせ、定價は一錢などゝ聲からしてうりあり

くもあり。齒の藥うる居合師の、買へば長刀を拔いて見せむとて客をつるもをかしく、その他をかしきこと、くさ〴〵あれど、石川雅望の才筆ならでは。うつし難くや。

夜に入れば、鍵屋、玉屋と呼ぶ聲のかしがましき馬場の中に、うちあげらるゝ烟火こそいとをかしけれ。うちあげはなび、空に紅龍ををどらし、仕掛けはなび、地に百花を散らすなど、いとめざまし〳〵。かくて夜もやう〳〵ふけゆくまゝに、烟火をさまり、物うる人も、見物する人もさりつくして、玉のみあらか、いとかう〴〵し。大月、華表にかゝりて、北斗光凄く、大村の銅像天地を睥睨して、高く夜風にうそぶくも、をかしや。

女心

白魚女史

誰がむかしにか酌みそめにけむ、御茶の水の流れに沿へる坂路を水道橋にかゝりて、近き高等の學校にでも通ふかと覺しき令孃の二人連れ、あなあぶなや、横田さん、車がと云ひざま、一人の令孃は片への令孃の袂を摑むが如くに引きて、慌て飛びのけば、よろ〳〵とよろめく足もと、漸くに踏み留まりて、何がをかしきか、がた〳〵と笑ひ、横田さん、貴孃、何をさうれ考へ遊ばす事のあるのです、私しが慌てずば、貴孃は今頃引殺されて居ますよ、オホゝと又高笑ひ。かたへの令孃も、僅に眉に微笑をこめて、貴孃が慌てるからあぶないのよ、私は何もとの答を半ばうちきゝて、なほ口輕く、なぜか此頃は島崎さんの學校へ來られぬならんといへば、如何にしけむ、顏を紅くして、容易に返答せむともせぬ横田令孃の顏をさし覗きて、なほ言葉をつぎ、彼の人の貧しきといふ事は、兼て知り居りたれど、まさかに月謝をとらんなどとは、思ひもよら

ざりしよなど、頻りに話しかくるに、横田と呼ばれたる令孃は、きくを厭ふがやうのけしきにて、輕澤さんもう其事は云はぬやうに遊ばせよ。さなきだに人の爲によからぬ事を申せしと、心苦しく思ひ居るものを。雪にも風にも、唯の一日も、學校を休まれし事のなき彼の人の、此一月ほど、見え遊ばさぬは、必ず彼の事を、口惜しく思しめしてならん、日來人にいはれて笑はるゝまでに、隔も心も置かざりし友垣なりしものをまさしくかくと見も知りもせぬ事を、わけなく思ひひがみて、かにかくと、あからさまに云ひのゝしる事のはしたなさ。思へど〳〵、耻かしく、くやしき事を、われながら爲したる事よ。嘸や不實の友と、うらみも恚りもをとしもしてならん。若も彼の事故に、やうなき病氣にてもかゝられなば、親一人子一人の頼みなき彼の人の母御の、嘸や歎かせ給はむ。口は謹むべきものとは忘れもせざりしを、悔しき事したる事よと、言葉の末もかき曇り、目元さへうるみたりしが、ゆきゝの人目を思へばな、オー寒い風やと紫の書包みにて顔を掩ひつゝ、涙を拭ひぬ。あな横田さん、貴孃は誠になさけ深き人かな。例へ手元を見ぬとて、其人の書物の間に入り居りしは、何よりの證據にはれはさずや。彼の人が例へ病氣にかゝりたりとて、母御が如何に歎かるゝとて、そは自業自得、身から出た銹、かくて朽つるが當然といふ者、何の人を怨む事も、をかしや恚る事のあるべき。それよりは、貴孃が思はでよき事を思ひ煩ひ遊ばして、御病氣にでもなられなば、それこそ宗襄の仁などいひて、人々にも笑はるゝのみかは、をかしく思はれ遊ばさんなどいふ輕澤令孃の言葉を、聞き兼ねたるけしきにて、横田令孃は少しいらだちていかで妾が仁者ならん、輕澤さん、もう神經にかゝる話は、うちやめ給ひてと云ふ折り節し、横田さん、輕澤さん、今れ歸り遊ばすか。御一所にころと、後より駈

け來りしも、同じ年頃の令孃。二人は振り返りたりしが、あな林さん、級がかはりし故に、つゆ御目にかゝらざりし。しばらくと挨拶も無造作に、下げたる面を上ると共に、はや輕澤は口輕く、林さん、島崎さんの一件、おきゝ遊ばしてとは、あまりに輕き輕澤の言の葉。さても〳〵、これが近ごろ開化したる敎の庭には、珍らしからぬ見聞草、利鎌にかけて、首なで苅りしたしと、さる老人の立腹も無理ならず。

島崎さんの事にてか。誠にお氣の毒な。あのやうなるよき人、が神も佛もないは。あのやうの重い御病氣にかゝりて。私はもう〳〵無宗敎と悟た事よ。どうぞして助けて上る工風の無きものか。母御が細き御手一ッに、よくよく御辛苦ながらに、お育てなされし御子なれども、林令孃の、はなしかけたるを、打ちきくより、横田令孃は、思はずも立ち止りて、林さん、アノ……島崎さんが御病氣。貴孃の御家へかゝられてか、何と云ふ御病氣。面を青くなして問ふに、林令孃は、答へんとして、ふと片への林醫院としるしある門の前に立ち止まり、話に家も忘れてと、思はずホゝと打ち笑み、またまじめになり、まだ貴孃たちは、島崎さんの御病氣、御存じなきにか、源因だにわからで、藥を用ゐずても、癒ゆる病なれど、源因のわからぬときは、あのまゝに取り逆せて、かへらぬ事になるも知らずとて、父もいたく心配遊ばしてなるが、横田さんは日來より並々ならぬ御中なれど、何か其心を腦す源因と思ぼしき事の、御心あたりを知ろしめされずや。輕澤さんは御存じとか。さらば何事にてか、話してといへど、横田令孃が睨むが如く見つむるに、さすが云ひかねて、たゆたふ折りふし、いだてんの如くに走り來りし男、つき仆さぬ計りに、三人の間をかけぬけて、とつかは玄關に駈け込むより早く、先生は居らせでか。飯田町の島崎より頼まれて參りぬ。今娘子がひきつけつし故、





早速御見舞下だされと、はう〳〵になりて云ふを、三人はうちきゝて、思はずも顔を見合せたり。

○　○　○　○

霜枯れて痩犬まよふ飯田町六丁目邊の、軒まばらなる裏街の片隅の長屋の窓に、洗ひはり仕立物仕り候と、薄墨のあとゆかしげに、書きながしたる札かけたる側の表札には小く島崎れんと記したる、いとわびしげなる家の内には、二八計りの花の少女、母の膝に取りつきて、母さま〳〵、あな母さま、如何遊ばされてか、母様、御氣を慥に遊ばしてや。妾は何處も如何にもなり侍らじ。母様、どうぞ氣を慥に遊ばしてや、母さま〳〵。あな伯母さま、悲しや如何にせん。母さま〳〵とて、泣きつ呼びつするを、際家の女房とおぼしきが、片手になだめいたはりつゝ、片手には生體なき老母を抱き起して、御内義さん御内義さん、お藤さんはもはや大丈夫、御覧ぜよ、お内義さん、お氣をたしかになされよ、御内義さん。ふぢはかくてあり、どうもせじ、安心してよ母様と、二人は左右に取りすがりて、呼びつ、さけびつ、慌てまどふ折から、宙をとばせて駈けつけたるは彼の林醫士、忙はしく車より下るれば、もの音に夫と早くも知りて、待ち搆へたる隣家の女房はかけ出でゝ、御醫者様にてか、どうぞはやく〳〵、お藤さんは生氣つかれたれど、母御の方が、反りてとの言葉を、醫師は半ばきゝながら、直に病人の傍により、母にすがりて正體なげなる娘に向ひ、貴孃はよくなりてか、まづよし〳〵、さやうに泣きては又逆上んに、心を静めて、彼方にて暫時やすまれよ。母御は預りたり、安心せられよと、さすがに物馴れたる扱ひ、娘はむせび入りて、たやすくは聲も出でざりしが、やうやくに、醫士に向ひて、僅に禮を述べ、妾は最早何の苦るしさを覺えず。されど母が。先生どうぞお助けくだされ。此のまゝに母を死なしては、妾の手にかけ

て殺ろせしも同然。どうぞ先生助けてと云ひながら、なほも母の膝にすがりて、母さま〳〵妾はもはやよくなりぬるを、母さまよ、今よりは必ず〳〵御心をいためまつる如き振舞は、決して〳〵夢なさじ、母様〳〵。どうぞ〳〵、元のやうものいふてよ、なぜものいひては給はぬ、母様、十年あまりの年月、星に霜にれきふし遊ばして、かよわき母様の御手一ッながらに、自らを人並になさんとての千辛萬苦、人にもうらやまるゝ高等の敎さへ、學ばせ給へるに、已れは御心をのみいため參らせ、かゝる口惜しきはかなき御最期をなさせ參らすとは何事ぞ、何といふ不幸の子ぞ。烏にもはんばの孝、鳩にも三枝の禮はあるものを、人と生れ、人の子となりて、人並にも越ゑて育てられたる身にありながら、高恩の萬分一も送らず、遂に妾が爲に母を死なすとは如何なる不幸ぞ。如何なれば此の身はかく計りに不幸の子とはなりしならん。母上許るし給ひてゆるし給ひてよと、膝にすがりて泣き悲しむを、醫師はかつ慰め、かつ叱りて、母御はうけあひたり、必ず助けむに、御身はさばかりに泣きても、またあしからむ。泣かれそ、心を靜められよ、母御は必ず請合ひしといふに、娘は少し力を得て、さらば未だ助かる事の侍りてか、嬉しや、母様〳〵とて、聲を限りに呼びさけぶ一心をしぼる聲の、流石にひらきてや、母親は固く閉ぢたる目を、僅に見開き、ふぢ子や〳〵や、ふぢ子は如何にせしぞ。彼のまゝになりはてしか。いとをしや。たゞの一口も面白き目も見せず、樂しき思ひにも合せず、うまきも與へず、うつくしきも着せず、いぶせき家に、朝より夕まで、母が稼ぐさまのみを、見せ死に殺ろしはてし事の悲しさよ。親甲斐もなき母でありしぞ。ゆるしてや藤、ゆるしてよ。母も共にゆかむ。待ちてよ藤よと、また其儘に絶ゑむとす。天ゆく雲もきれ〴〵に、破れたる窓に風むせぶ。

文林

冬風　近衛忠熙

夕がらすねぐらにまよふ聲すなり
　木のはみだれて風やふくらん

冬花　壬生基修

百くさのかれふす霜をうけながら
　ときめきかほに枇杷の花さく

冬瀧　堀河康隆

氷るらんやまかせさむく冴くれて
　かすかになりぬ瀧のひゞきの

冬竹　西四辻公業

わが友と植たるにはのくれたけに
　冬もひとめのかれぬやどかな

冬雲　黒田長知

さもころは時雨をはこぶ雲ならめ
　空さだめなく行きかよふかな

冬海　西三條公允

浦まつにさゆるあらしや沖とはく
　しぐれし雲のかへしなるらん

霜夜鶴　高崎正風

子をおもふ霜よの鶴のこゑきけぞ
　吾さへとけてねられざりけり

閑中雨　小出粲

さゝがにの糸にたまれる露みえて
　雨しづかなるよもぎふのには

冬松　毛利元敏

下草のしもがれしよりただしげる
　まつも淋しくれもはるゝかな

冬獣　本多忠貫

さえわたる月かげ寒しやまかせに
さけぶましらの聲もきこえて

冬雁　前田利鬯

をちかたの秋にをくれてくる雁は
越路のゆきを見てやたつらん

夜落葉　冷泉爲柔

閨の戸におとづれ寒くきこゆるは
かせの吹まく木のはなりけり

聞初雁　諏訪忠元

ゆふまぐれ姿はそれとわかねども
めづらしときく初かりのこゑ

駒迎　仝

ひかるゝを汝もうれしとおもふらん
くもゐにのぼるかひのくろ駒

鷗　遠山英一

釣舟もまだみえそめぬわさがはに
ねぶるかもめのゝどかなる哉

軒秋雨　三浦千春

秋とだにきくも涼しきせみの羽の
袖うちしめりむらさめぞふる

山家友　仝

大御代に皆いではてゝやまにすむ
友はまれにもなりにけるかな

竹芝の浦にて　大畑弘國

百千舟さをかぢはさすおほ御代の
みつぎをはこぶたけしばの浦

仝

たをやめの眉引きなして竹しばの
なみまに見ゆる安房の遠やま

政子の墓をすぎて　龜谷行

鎌倉のさかえしこともゆめなれや
ゆめのあと訪ふ峰のまつかせ

田邊紅葉　三輪義方

夕日さすたなかのもみぢ遠けれど
さはる隈なくみわたるかな

池上冬雨　林甕臣

池水もさむきにわめはれど立てぬ
枯れて折れふす破れ蓮の上に

名所雪　仝

誰がふでの繪島がさきか幡磨がた
しかまの浦のゆきのあけぼの

山紅葉　師岡正胤

百草に野邊をまかせてわきやまを
獨りしめたる樹々のもみぢぞ

寒松　仝

山松のいろぞかはらぬたにがはの
みづのみどりのこほる冬にも

近初雁　宇野豊道

まつ友のたよりやもちて來りけむ
軒ばにれつるはつかりのこゑ

寄月懷　仝

思ふ事たえぬうき世になどてかく
月のひかりはさやけかるらん

民戸烟　永石德文

にぎはへる御代のしるしと仰ぐ哉
民のかまどの立つるけぶりを

冬灯　鍋島榮子

照月のかけ見るだにもさむき夜は
ひとり時めくまどのともしび

社頭冬月　蜂須賀隨子

身潔して凉しといひしみたらしに
すむかげ寒しふゆの夜のつき

山影寫水　前田朗子

足びきの山のこずゑもろのまゝに

うつりてきよき谷がはのみづ

冬眺望　柳原愛子

八千草の花さくわきはかくむかり
ひろき野べとも思はざりしを

冬人事　小池道子

さよ深くうつ音すなりしづの女は
つみしにひ綿はしわけぬらん

山家時雨　税所敦子

山寺のかねのひゞきも打ちしめり
しぐれにくるゝたにのした庵

霧中山　北島以登子

箱根やま登れど見ゆる富士のねに
たび路のうさもわすれける哉

冬故郷　松平健子

散朽しれち葉れはひてふるさとの
にはわたらしきけさの雪かな

山路落葉　田邊君子

杣人のかよひしわとも見れぬまで
もみぢちりしく山のしたみち

冬鍾　鶴久子

霜をふむ山かげさむしいりわひの
かねのひゞきもされ渡りつゝ

折紅葉　仝

をりとりてみれど青きも交りけり
ゆふひのろめし峯のもみぢ葉

初霜　宮地琴子

さし櫛のわかつきれきに面しろく
見ゆるとなりの屋根のはつ霜

河千鳥　田邊和気子

をち返り千鳥なくなりよもすがら
かもの川かせ吹きしきるらむ

紅葉散　安東菊子

さそひ行風にまかせてうつくしく
ちるや紅葉のこゝろなるらん

荒屋菊　仝

つくろはであれたる庭の垣根にも
秋をわすれぬきくのはなかな

初冬　内田遊歌子

足引のやまよりおろす木がらしの
をとにも冬はしるくぞ有ける

落葉　仝

夕月のかげのくもると見えつるは
あらしのさそふ木の葉也けり

をりにふれて　海上壽子

うしとのみ何かなげかむよの中は
こゝろからこそこゝろ易けれ

在原業平　仝

君をおもふ其眞ごゝろの一すぢに
やま路の雪もふみやわけけむ

恭奉追悼北白川宮殿下長歌幷短歌二首

大畑弘國

かけまくも、あやにかしこき、おほきみの、まけのまにまに、武士の、八十伴の雄を、あともひて、千舟百舟、とりよそひ、まかぢしじぬき、沖つ風に、ま帆うちあげて、もろこしのとほきさかひに、御軍を、あなゝひたまひ、あたみたる、しこのやつこを、打ちきため、あらぶるものを、ことむけて、わが食國と、事さだめ、掟たまひし、みいさをは、高く尊し、天地と、月日とゝもに、萬代に、あふぎまつらん、かしこかれども。

短歌

かなしくもあからしま風吹あれて
月のひかりぞくもかくれゆく

島つ風くもゐにあれてあまぐもの
ゆくへもしらずなりし君はも

老い　林　甕臣

わかき女の、戯れどみて笑ひそぼる丶、視れど、可笑しくも無し。わかき男が、腹よぢり臍の、宿がへ爲どかり猿がう、聽けど、面白くも無し。えならぬ香、たきしめたる袖の追ひ風、鼻うがつも心ときめきも爲ず。いかどかり美味珍膳に箸とるも、壯き時のごと齒にも合はず。唯だ肌身に觸れて、すゞろに感じればゆるものとては寒き風のみなりけり。

視聽齅味觸にれける五官の感能知覺年に疎く月に遠くも成りまさるかな。嗚呼取るべからざるものは、歳なりけり。吁關守も無く、返り來ざるものは、月日なりけり。

火桶いだき皺む面づゑつくぐ〵と
　れもへで年は寄りにけるかな
行く牛の遲きこゝろの身にも似ず
　年のみ世にはれくれざりけり

なほ忘れては、昔こひしうのみ、來し方の在りし事ども、思ひ出でらる丶も、吾ながら淺ましく、悲し。

老いぬれど老いのくりごと繰返し
　かへすぐ〵もむかししのどる

都よ上れる記（つゞき）　永石德文

二十六日、はれたり、起き出で丶見れど、海原かすみみちて、浪のどかなり。伊豆の島山もほのぐ〵と見えたり。さて鋸山なん高くそびえたる。山の頂さながら鋸の刄に似たれど、さる名は負持ちけん、その山のふもと金谷の里より、左手の方、加知山の崎まで、浦のさま弓形をなせり。この浦の中らよりは、やゝ加知山の方によりて、いさゝか岸をはなれて、たゞずまひをかしき島なんうかべる。こゞしき岩が根に老松の枝垂れたるなど、島のけはひいふべくもあらず。この島

の名を何といふと、宿の主にとへど、答へけらく、この島はあやしき島にて潮干れども、根あらはれず、潮滿ち浪高けれども、根かくれず。されどこれを、浮島となんいふと答ふ。古き史に巻向の日代の宮の御代に、上總國安房の浮島の宮とみえたるは、即この島なるべし。この御代には安房もまだ上總の國の内なりしなり、この島西東にせばく、南北に五六町ばかりもやあらん。實になべてならずたふとく覺ゆ。

千代へつる松にやとはん大御ふね
　よせけん安房の浮しまのみや

さてこの浦よりも、瀛船都に行通ふ。されど午の時の船出を、徒にやは待ちすぐさん。いでや鋸山にもがなとて、立出でゝ暫しゆきて、ふもとにいたる。さて水もなき小川にそひて、これを路といはゞいはん。只人のふみたらんあとをとめて、物ふりたる木立藪生の間を分けつゝ登る。山ふところに日本寺といふ寺あり。結構さばかりにもあらねど、庭木立など物ふりて、さびしく、所柄人氣遠き山寺ともいひつべし。神龜の元の年甲子の開山といひつたふれど、今は千年あまりの昔なりけり。こゝより上つ方は、木立なくて、小笹にとりつき、岩が根にすがりて登る。五百羅漢といひて、石の佛像數も知られず。形大さ同じからず、すがた面もちはたひとしからず。さがしき岩が根のくぼまりたる所毎に、十、二十づゝ居ゑ並めたり。諺にいひけん餘り佛うべもと覺えて可笑し。のぼり果てゝ頂にいたれど、少か平かなる所に、天御中主の神の石祠たてり、この山の峯づたひは、安房と上總の國の境になん。世に房州石といへるは、専らこの山よりきり採るなり。さて見めぐらすに、實に十州一覽のきこえ空しからず。鹿野、清澄、は更なり、富士、足柄、箱根、秩父、甲斐がね日光、小筑波、にいたるまでに、掌の上に見るが如し。しばし旅心地も忘れたりつるに、ほのかに

滊笛の聲するにおどろかされて、今はとて、只下りに下るさて旅宿にかへりて、晝げものして、午の時ばかりに舟にのる。かくて浦賀をさして、内海の海門をわたる。舟の上よりみれど、けしき更にいふばかりなきを、頓に風ふき出、浪あれて舟ゆれにゆる。人皆舟酔しつゝ、かは青ざめて、生たらんけしきもなし。さて舟浦賀に入る。このみなとわが上總の國にては、みも及ばず。觀音崎をすぐるころよりなん、風やゝなぎ、浪おさまり、やう〳〵都もみえてうれし。四時ばかり舟越前堀につきぬ。もし下總の國かけて上りたらましかば、きのふは既につきつらんを、いろ〳〵旅なか〳〵に後れつと、悔れども、今は及ばずなん。かくて心覺えにとて、あるがまゝを筆にまかせて、かきつけたるが、あやしうかゝるものになんなりにける、

（をはり）



●後桃園院天皇祭の御親祭　本月六日、後桃園院天皇御親祭次第は

後桃園院天皇御親祭次第

午前第九時御殿の御裝飾を奉仕す、同時三十分宮内省官員著床、次開扉(此間奏樂)次神饌を供す(此間奏樂)次祝詞。同第十時出御(先是親王以下著床)次御玉串を奉り給ひ　御拜御告文を奏し給ふ畢て入御御拜の間親王以下著床の諸員起つ、次皇太子殿下御代拜、次親王王拜禮次宮内省勅任官拜禮、次同奏任官判任官拜禮、次神饌を撤す(此間奏樂)次閉扉(此間奏樂)次各退出。同第十時五十分宮内省官員著床、次閉扉。同第十一時　皇太后陛下　御拜御玉串を奉り給ふ　皇后陛下　御拜御玉串を奉り給ふ、御拜の間著床の諸員起つ、次閉扉、次各退出

●女王御降誕　去月三十日、宮内省告示、第十七號にて本年十一月二十三日、邦憲王殿下の妃好子殿下、分娩女王降誕由紀子と名けらると告示せり。

●**歌御會始**　明年、歌御會始、御題は、「寄山祝」と仰出され、詠進書式竝に期限等、左の通定められたり。

料紙は檀紙、奉書、杉原紙を用ふべし。但し遠地郵送の分は、美濃紙、薄葉の類を用ふるも苦からず。且つ詠進期限は一月十日まで。

竪詠草

御題

上　名

但し五つ折

裏面書式

某府縣下某國某郡某市

町村住

華士族又は平民

苗字　名

官位勳等有爵者は苗字の上に記載すべし

●**靖國神社の臨時大祭**　靖國神社の臨時大祭は、彌々來る十五日招魂式を行ひ、十六、十七、十八の三日間、大祭を擧行し、十九日直會を行ふことに決せられたり。右に付き公衆よりの備へ物餘興の如きは其志に任じ、大抵は許可せらるべき筈なるも、餘り不躰裁鄙猥に屬するもの丶如きは、許可せられざること勿論なるべく、又右備物等に付ては、飾付其他の都合もある故、豫め其品目等を來る十二日迄に、靖國神社々務所に屆出なば、夫々許可せらるゝ趣なり。最も現物の納付は十二日迄に限らざる由。

●**寄贈品及献金申出期日**　陸軍及海軍へ寄贈品及献金等申出は本月十日限り、受領せざる旨、陸軍海軍兩省より告示せり。

●**銅像の竣成と拜觀**　大婚二十五年式、御擧行の際、陸軍將校同相當官一同より、献納する可美眞手命の銅像は、過般來造型師佐藤昭氏、鑄造師鈴木長吉氏の手にて製作中なりしが、今般愈々竣成し、去る十一月五日を以て濱離宮内に定設し、其筋へ附納濟となりしに付、本月八日より一週日の間、東京陸軍將校同相當官其他本像建設に關し、斡旋幇助の勞を執りたる內

外の美術家等へ、特に拜觀を許さるゝ筈なりと承りぬ。

●大砲奉納　高島將軍が南進軍司令官として、臺地に抵れる際、颶然碧空より飛翔し來りて、乘船橫濱丸の檣上に宿りたる一羽の鷹は、凱旋の際携へられしが、今般別格官幣社湊川神社へ奉納することゝなり、去二日午前折田宮司の許迄贈りたり、又同神社へは平安附近に於て得たりし、直隷總督文華殿大學士太子太傅一等肅毅伯李鴻章鑄之と銘せる野戰砲一門及臺灣舊制の小口徑大砲一門、(長一間半程)をも奉納したり。

●貴婦人の恤兵献金　去る九月中、淺草本願寺にて征臺軍に寄贈恤兵金品取次の擧ありし以來、同寺内に設けある貴婦人法話會員は、會長三條公爵婦人を始め、毛利、九條、岩倉、鷹司等の公爵夫人及土方、宗伯爵夫人、裏松、竹屋、牧野、秋元、曾我、五條、九鬼安藤等の子爵夫人岩崎、安田、大倉、藤田、籾山の各夫人其他百余名より續々金品を寄贈し、恤兵部よりは夫々承認狀を下附したりと

●日光山の大修繕　同山社寺堂宇の大修繕は、半ば已に其時機を失したる程の手後れにて、何分建築以來二百餘年の星霜を經し事とて、案外に朽腐の箇所多く、先頃より保晃會に於て委員を擧げ、夫々調査を爲さしめしに、所謂日光山全体(山内は勿論中宮祠等迄悉皆の社寺堂宇、總建物中、内部は暫く擱き、屋根戸扉、門扉、玉垣等都て外廻りを一と通り復舊修繕する費用の概算は、殆ど百萬餘圓の巨額を要すべき見込にて、此内二荒山輪王寺の諸建築を除き、獨り東照宮に屬する部分だけにても、七十萬餘圓を支出せざれば、舊來の美觀を存する能はざるにつき、保晃會員の心痛も一方ならずと云へり。最も此費用算出は、曾て幕府に於て、新築せし當時の仕樣帳、其他の舊記古書類に依

りて調査し、專ら復舊修繕の見込を以て、算定せしものなれど、更に東京美術協會、及漆工會に託し、精密なる再調査を遂げ、愈々捨て置き難き箇所より順次に着手し數年を期して完了するより外に策なかるべしとの事にて、多分は此順序に決るすならんと云へり。又修繕方法順序の何れに決するとも、今日現在を保晃會金と、同社寺の財産だけにては到底かゝる大修繕の爲し得べからず、結局政府或は其他より永年賦借金なりと爲す事なるべしと聞けり。

●曾我兄弟の七百年忌　富士の裾野の五月雨に、不倶戴天の怨を復して、百千年の後にまで孝子の譽を殘したる曾我兄弟の遺跡は、斷碑蘚に埋もりて、尋ぬる人も稀なりしが、今年は其七百年忌に相當するを以て、同兄弟の像を安置したる靜岡縣、富士郡、鷹巢村安養寺に於て、法會を執行し、併せて紀念碑を建設せんとの計畫あるよし。

●神戸婦人會　近日紳士、紳商、官吏の婦人間に於て、交際を親密にし、兼ねて慈善を爲す目的にて神戸婦人會を組織するよし、從來婦人の團体は、往々人形的にして、常に男子の操縱に任ずるもの多し。甚しきは紅粉を施し、盛粧を凝らして、社會に翺翔し、以て奢侈の媒介を爲すものなきに非ず、神戸婦人會願くは、此渦中に込まるゝ勿れ（日本新聞）

●償金と敎育費　今回淸國より收容したる償金の一部を、敎育費に用ひんとの議論、甚だ盛なるが、さて其敎育費中如何なる費目に用ゆべきやに就ては、敎育者中にも、種々意見を異にせる由、今其重なるものを掲ぐれど

○小學校の資本金に充つべしとの意見　今や國家の前途、軍備擴張問題の横はるあり、其他諸般の着手すべき事業多く税源を見出すの必要ありて今日迄地方税たりし營業税の如き、或は國税となるやも計り難し、然れど町村等の如きは、税源を失ひ爲めに普通敎育費の點に於て、欠乏を來し、完全を欠くに至るの恐あり、故に少くとも償金の一部を以て、町

村小學校の基金となすべしと、是れ學政研究會派、及國家教育社、教育時論派の間に行はるゝ議論なり。

○紀念大學を設立すべしとの意見　又右に反して町村自治体の小學校は、國家より相當の保護を補給するは、不可なけれども、基本金迄供給する如きは、自治体の精神にあらず、宜しく其償金の一部を以て、一の大學を設立し、紀念として永く東洋の文化を計るべし、此大學たる決して平々凡々唯だ學士を造るといふに留らず、文化を進むるを以て、自ら任じ先づ東洋に於て、未だ發見せられざる諸の科學の進歩を計り、東洋の一大大學を以て、自ら期すべきものを設立すべしと云にありて、教育報知派の専ら唱ふる所なり。

●東京大阪間の電話試驗(好成蹟)　其筋にては我國に於ける、長距離電話の發達を計り、其第一着手として、來年度より東京名古屋間に電話架設の計畫あり、既に同地間の試驗は過日之をなしたるに、頗る好結果を得たりとの事なるが、此際更に進んで、東京大阪間の電話を試みんがため、東京電話交換局よりは、技手を大坂に派し、從來の東京大坂間電信線の直線を利用し、同地郵便電信局と、東京電話交換所間の、談話を試みしに、天候惡しく、多少の風雨ありしにも不拘、相互の談話も、十分明瞭に聞くを得、頗る好結果を得し由にて、其音聲の如き、東京市中に於けるものに比し、稍低きかの感あるのみ、過日執行したる東京名古屋間は、東京市内のものに比し、音聲も一層明瞭を感せし由にて、尚は東京大坂間は引續き、二三回も種々なる方法を設けて、十分なる試驗をなす筈なりと。

●乳房に壓死　京橋區南小田原町某が妻は去月十七日出産の二男の添乳して寢に就きしが、翌曉目を醒して見れど、無慘やわか子は絶息し居るにぞ、打驚きて、取敢ず其筋へ届出で、奥野警察醫出張檢斷せしに全く、母親が熟眠し、其乳房にて壓死せしめたるものにて、治療の效なかりきとぞ。子もたる方は注意したまふべきなり。

●孝子熊を刺す　近來、北海道にて、熊害に罹るもの、續々として跡を絶ず。此程の事かとよ、石狩國雨龍郡、深川、第三中隊の屯田兵、林彦太郎と云へる人、長男某を伴ひ、用足しにと出でたる歸り途にて、同村字ェチャンといふに差掛りしに、夕靄に樹下小暗き茂林の陰にたゞならぬ物の唸る聲聞えたり。林氏は護身用の獵銃取り直し、瞳を凝して覗へば、前途を塞げる大巖の峽間に、長七八尺もあるらむと覺しき巨熊の此方を疾視て、爪を研ぐなり。今は逃ぐとも遁れじと思へば、林氏は構へたる獵銃執りて、先づ其一發を放ちたる彈は、過たず熊の左りの肩を打貫けり、熊は眼を瞋らして、疾風の如く飛び來るを、林氏は透さず、又擊てる彈に、下腹を劈ざき、續きて放てる三發目も、同じく急所に止りたれど、左計りの熊も、これに弱りてや、其場に斃れたり、林氏は得たりと走り附て、再び一發を放たむと近づく時、今まで死したりと見えし熊は、矢庭に躍り起ち、林氏に摑み掛るとぞ見えし。看る〳〵左りの鬢先を滅利々々と抓き裂けり林氏も今は必死なり總立となれるくまの胸元に組み附きて、捻倒さんとす。熊は一聲大に吼りて摑み裂むとす。傍らなる長男は、小銃把て擊んとすれども、父に過失あらむことを虞れて、躊躇ふ間に、痛手に弱りたる父は、滿身を朱に染みて、其危ふきこと一瞬の裏にあり今はと腰なる銃劍を銃に裝け、突込みたる狙ひは狂はずして、深く〳〵くまの肋腹にあたれり、二刳り三刳りすれど、さしもの暴れに暴れたる熊も、重ね〴〵の痛手に堪ずして、山谷も動かむ計りの咆哮て、終に刺留られたり、必死の窮阨を免かれて、思ひの外の獲物したる父子が喜悅推て知るべし。斯て其の翌日は、同村三中隊小學校の開校式なりければ、父子は此肉を割き、式の宴會の席に出だしたるに、人々は此父子が勇氣、殊には長男が健氣なるを賞歎して措かず、開校の宴に、孝子が

名譽の獲物を賞翫するといふは、一同の面目なりとて、更に歡喜の盃を擧げたりといふ。

●女學講義錄　第一卷は大日本女學會より出つ。小學校の卒業後の女子を敎ふる程度なりといへども、今少し平かならざれどよみときがたかるべくや。學科目の外に手藝科目小說詞藻雜錄雜報あり。今少し平易にかゝば、よきものとなるべし。

●日本の家庭　第一號（十二月一日）いできたり。記事やすらかにして、誰人もよみうべく、實用をむねとしたるなど、愛すべし。（日本家庭社發行）

●我國の辭書（つゞき）

是より十年ばかりを經て、安永八年に、本居宣長翁の詞の玉の緒成れり、前々なるてにをはの書に較ぶれば、こよなく精細なるものにて、其方法に新面目を開き、古書を讀み、歌文かゝん人の寶典となれり、其後廿年あまりたちて、寛政十二年に、又言語活用抄の著あり、鈴屋翁年譜に、門人田中道麻呂に示して、既に書しめ給へり、詞八街のおや書といふべしとみゆ、これは寫本にて世に傳へたり、其後七年過て、文化三年、宣長翁の子春庭の著はせる、詞の八街世に出たり、始て言語に四種の活用ある事を發明して、其名稱を設け、古書に徵して、例證を擧げられたるが、永く動くまじき模範となりぬ、又次て詞の通路を著はし、詞の自他によりて、活用の變動する區別を示せり。

宣長翁と同じころ、京師に富士谷成章といふ人あり、（北邊と號す、儒者皆川淇園の弟なり）これは古學より成立ずして、近體の歌（二條冷泉）より入しものなるが、古學をも折衷して、おのづから又一家の歌學を爲せり、著述多かる中に、歌詞を、挿頭、裝、脚結、の三區に分ち、俚言に當てゝ、聞え易く辨解せし、三種の抄物あり、其中にあゆひ抄は、專らてにはに係れるものなるが、卷首に裝圖と標して顯はせるは、少しく活語を示したるものゝ如し、又此後寛政五年に至り、小澤蘆庵の振分髮あり、過去、現在、未來の事より、活語に及べる說もあれど、これ等は皆其說委しからず、はた違へる筋も多かれど、此時代に言詞學の開けん氣運として、かゝる書どもの出來たるを思ふべし。

詞の八街盛に行はれ、諸人これを重んじ用ふる事、既に數年に及びし頃、若狹の小濱の僧義門、いたく此學

ひに心を入れたりしかど、發明する事多く、山口栞、活語雜話、玉の緒繰分、其他數種の書を著はして、此學漸く緻密になれり、かつ八街の圖に據りて、將然言、連用言、截斷言、連體言、已然言、希求言、などいふ名稱を作りたるは、此法師をもて嚆矢とすべく、又玉の緒八街二書の意を併合して、新に友鏡といふ圖を製し、それにより活語指南の書を著はして、初學に便を與へたる類、まことに此道の前進者にして、當今行はるゝ文典の基を起しゝものといふべし。

これのみならず、天保年中より、國學者と稱はるゝ者、稍大家となれど、大かた此學びに心を傾け、各一家の著述あり、其人たちは、本居宣長門に林國雄、(言靈のしるべを著す、今の甕臣の祖父なり) 石塚龍麿呂、(詞の玉衣) 鈴木朗、(言語四種論) 殿村常久、(かたむみ草) 又春庭門に足代弘訓 (詞八街補翼) あり、其他流には、野々口隆正 (詞の正道語格直言の類) 中島廣足、(詞八街補遺其他) 橘守部、(助字本義一覽) 猻原廣道、(てには係辭辨) 物集高世、(辭格考抄本のみ刊行したれど、其他の著書多くあるべし、今の高見教授の父なり) 權田直助、(國文眞柱) 堀秀成、(語學問答其他多し) の類あり、又小澤蘆菴の門流なる海野幸典は、天言活用圖を著はし、少しく奥學と稱せられき、こゝに擧げたる外、管見に及ばざる學者、又著書等多かるべし、かくの如く維新の前より此學風を張りて、子弟を教授する人多かりけれど、多かた活語の學と稱たる中に、獨鶴峰戊申の著書を語學新書と稱へたるは、當時目新らしく覺えたり。

五十連音圖を考究するは、語學の基本にして、既く、顯昭仙覺の輩も、これに據りて古言を注せし事あり、されど取分きて、此事を云へる書は、古く管絃音義(群書類從に收む文治元年著)などいへる、樂家の書に僅に其説をみるのみ、降りて應永年中に、明魏法師(藤原長親の薙髮したる名)の作れる、倭片假字反切義解あれど、其説いまだしき上に、何れもれをの所屬を既に違へたり。(天文本和名抄の首に載せたる音圖の事はこゝに云はず)

五十連音圖は、神代より傳たりといひ、又吉備大臣の唐土より持來せりともいひ、又天台眞言の學侶になりてより、其教のために設けたりとの諸説あれど、其説長けれど、こゝに辨明せす。

德川時代となりては、契沖東滿眞淵以來、皆此五十音を以て古言を解釋する便とせり、因て村田春海の五十

音辨誤、細井貞雄の五十音考の類、特に此事を記せるものあり、又谷川士清は、和訓栞の大綱の中に、音韻の事を論じ、五音相通して活用をなす事を云へり、又平田篤胤の古史本辭經は、古語延約通略說、古言清濁說の類も交はりたれど、主として五十音を解釋せる者なれど一名を五十音義訣ともいへりき、此他の人の著述も猶多くあるべし。

音韻の學は、古言を解くに用ゐるのみならず、總べての古書に用ひたる假字の義を辨し、地名又名氏を記載せる上にても、此學に通せざれば解せざる事多し、たとへば、地名にては、相模をサガミ、讃岐をサヌキ、と訓むが如き、必ず音韻の轉し用ふべき例によりて、然か定め書きたるものにて、漫りに爲すべきにあらざるは、本居翁の地名字音轉用例といふ書に明かなり、又人の名氏に於ても、中臣の習宜をシホゲ、宇合をウマカヒと訓むも、音轉なる由先輩の說あり、されど從來語學する者、やゝ深遠の域に渉れど、音韻の學に分け入る輩あり、其は既く義門法師は男信(ナマシナ)といふ書を著し、(上野國の郷名なり)黑川春村は音韻啓蒙といへる數十卷の撰著あり、又文政中、太田全齋といへる音韻家ありて韻鏡の傍訓を考正増加し、漢呉音圖、同徵、といふ書を著はしたるは、いたく國學者の音韻を考ふるに便りよき物なれど、わが友木村正辭は大學にてこれを講明したりき。

かくの如く、中古以來、言詞の學に關りたる人と、著書を縷述し、かつ德川時代となりて、活語學の起りたる本末を、みるに煩はしきまで述たるは、今の學校にて敎習する國語の科は、維新以來外國語の學によりて、創造したるものならんと、靑年輩の思へるも有ぬべきにより、賀茂翁以來英邁の學者、心を盡し書に著して、此道を擴張したるを示し、かつ上古より語法の正しきは、更に他に求めたるにあらざるを明かにし、今日の文明世界に當り、ます〳〵講究して、國光とすべき眞心よりの所業なり

兼題

十二月廿日
- 歌……梅花先春
- 文……歳暮

教の庭

十二月五日　兼題氷始結　（天地人の外は原稿到着順なり）

天　三河國寶飯郡下地村　永井さい子

霧はらふをしの羽風のれとさゑて
けさころむすへ池のうすらひ

地　筑前國穂波郡飯塚町　林久子

うなゐらか騒ぐ川へにきてみれと
けさめづらしく結ぶうすらひ

人　下野國足利郡足利町　川田孝子

けさみれとかたながれして我門の
小川のみづはこほりろめけり

池の面にちりてうかへるもみち葉を
むすひろめたるうすこほりかな　河野文子

冬の夜にしもをかされてかゝみなす
にはのいけみつまつこほりけり　安井章子

閑なれしかけひのみつもおさせぬは
いまやこほりのむすひそめけん　丸山須磨子

朝日かけまたさゝぬ間をいのちにて
むすひそめたるいけのうすらひ　鈴木美惠子

おく霜をふみてののちのうすこほり
さすかにけさはめつらしきかな　牧野幸子

今朝見れは結ひそめけりうすこほり
ふゆのはしめのしるしはかりに　牧野楢子

こけぬまにこらも來て見よわか宿の
にはのやりみづこほりそめたり　牧野榊子

おきいてて向ふたらひのひもかゝみ
さきを得かほにむすひそめけり　牧野澤子

池の面のこほりはかせのさそふめり
きたのかたよりむすひそむるは　牧野時子

水そこのさゝれもすきて見ゆるかな
むすひそめたるけさのうすらひ　進藤かれ子

からにしき流さしさてやもみち葉の
うかふかたよりこほるかはみつ　進藤すゝ子

池みつにちりしもみちを今朝見れは
むすひさめたりきしのうすらひ　進藤もと子

打ちよする池のさゝなみおさたゑて
みきはのこほりむすひそめけり　高井孟子

霜かれしあしをたよりにふるいけの
みきはは今朝そこほりそめたる　佐々有鄰子

かせ寒みさぬゆく夜中のつきかけを
こめてそみつのまつこほりける　國武すま子

今朝見れはすゝりの水もこほりけり　奥原とも子

秋の庭

よへのあらしや如何にさわけむ

夢さめて門田をみればよひのまに
かがみのごとくこほりゐにけり
堀谷よし子

初こほりむすびそめたりきのふけふ
さそふあらしのかせのさむさに
堀谷きく江子

水とりのは音もせすさ出てゝみれば
いけのおもにはこほりゐにけり
堀谷やな子

水とりのはおともけさはたえにたり
こさわりなりやこほりゐたれば
堀谷よし江子

けさよりはあしまの氷りさちそめて
ふゆのしろしのまつみゆるかな
静間密子

さえさえし夜はのあらしの末つひに
むすひそめたるけさのうすらひ
山田榮子

何時の間に冬はきにけんかりはてし
田の面のみつもこほりそめたり
溝口直子

うすらひの結ひそめたるけさ見れば
かけひのおともたえにけるかな
大島愛子

あしかものさわぐ羽風のおさたえて
いけのこゝろもこほりそめたり
澤田俊子

この朝けあらひてすてしみつまても
いつかこほりのむすひそめたり
遠藤きん子

けさよりはこほりそめけん里かはの
なかれのみつのおさもたえたり
越山雪子

此あさけかけひのみつもこほりけり
きたかせさむくふきしすさめは
浦島龜子

空さえてひかりもきよきつきかげを
いけのこほりのさちにけるかな
吉川久に子

けさみれはあらしに結ふはつこほり
いけのほさりやさむけかるらん
小幡富美代子

やまかはゝけさやはしめて氷るらん
ささわのいけにかもそむれゐる
小幡千代子

いつになくよさまぬ影さありあけの
つきに見いてしいけのうすらひ
日下さく子

袖ひちてむすひしなつもゆめのまに
こほりそめけりやまのゐのみつ
小町谷里江子

きのふけふみやまおろしの風さむみ
にはのかけひはこほりそめけり
碓井信子

たえたえにかけひの音のきこゆるは
けさのさむさにこほりそむらん
碓井武子

こささらにさむきは冬のしろしさや
けさくむみづにうすくこほれり
碓井和可子

池みつにちりしこの葉をうすらひの
むすひさめたる今朝のさむけさ
諏訪晴子

ちり浮ふもみちに秋をのこしおきて
いけのおもてはこほりそめけり
師岡千代子

朝戸あけてむすふたらひの瀬らひに
夜半のあらしのほさもしられぬ
三笠友子

なくさむるかけひの水も音たえぬ
おもへはけさはこほりしてけり
富士野安香子

夜のほさにこほりや結ふけさみれは
野中あさ子

つゆもみたれぬたきのしらいと　森のふ子

なしかものよふけて池にさわぐなり
たまものとこもいまこほるらし　重松たか子

さためなきしくれの雨のたまりみつ
こほるそふゆのはしめなりける　久松勢伊子

よひの間に志賀の浦なみこほりけむ
けさは小ふれもとほさかりゆく　金津武雄子

かもつとふみたらし水も今朝見れは
ふくかせさむくこほりそめけり　中村壽代子

ひさこもてくまむとすれは游こほり
むすひろめたるにはのましみつ　林みつ子

月さはしなかれもいつかおとたえて
こほりそめたるたにかはのみつ　羽田三緒子

寒かりしよはのなこりは手あらひの
みつにむすへる今朝のうすらひ　河田いし子

ちりうきし紅葉もけさはそのまゝに
こほりそめたるいけのおもかな　川口政子

風さむくたにのみつおとたえ〳〵に
おち葉かしたはこほりそめけり　梶井久子

ひとりぬるさむしろのみと思ひしに
なしのよとこもこほりそめけり　内田はる子

寒かりし夜半のほとこそしられけれ
けさ見ねそむるいけのうすらひ　内田たけ子

ちりし葉の動かぬまてに今朝見れは
いけのおもとはこほりそめけり

冬はまたあさゝはいつみあさけれは
みきははかりそこほりそめたる　太田貞子

水しめかつかひのこししみたらひに
むすひそめたるけさのうすらひ　廣田さめ子

山さとはふゆきにけらしけさみれは
むすひそめたる小田のうすらひ　山崎すへ子

あるまたきこほりそめける池みつは
よはのあらしのなこりなるらん　岡佐波子

散りうかふ紅葉のにしきたえ〳〵に
むすひ初めたるいけのうすらひ　植木鋼子

きのふみしいつみもけさは氷りゐて
さむさならふるしもつきのそら　常盤國子

今さはゝやちりて浮へるもみちはの
にしきなからにこほるいけみつ　眞鍋直子

うなひ子の集ふなみれはけさはゝや
かとの小かはにこほりむすへり　田津木久子

行くみつのおとそふまゝなる浮くさの
こゝろさたまるはつこほりかな　青木春子

さむけさに庭のいけみつけさ見れは
まつこそこほりむすひそめけれ　北村いの子

むすほれしおもひは早くとけたれと
とけぬはいけのはつこほりかな　北村定子

めつらしと岸のうすらひ手に取れは
きえてのこるは木の葉なりけり　小野田のふ子

ふくかせにあしの枯はのなひかぬは　北村米子

けさいけみつのこほりそめけん　北村孝子

冬けさもいさゝまさりて見ゆるなり
けさいけみつのこほりそむれは　北村貞子

おきいてゝけさ見いつれはわか宿の
かめのみつさへこほりそめたり　松尾蓰子

いつのまにこほり初けんあさかせに
なひかすなりぬいけのうきくさ　楠瀬さめ子

うすらひのけさは結ひてふくかせに
いけのおちはゝゆられさりけり　瀬戸榮子

風さゆるかけひのみつのおさなきは
あかつきかけてこほりそめけん　福地ふく子

松かせにおさをゆつりてやまかはの
きよきなかれもこほりそめけり　遠山櫻子

風の音もきのふをあきさ吹きかへて
ひもかゝみこそむすひろめけれ　平野君子

宵の間にふりしくれはあさかせに
木の葉をさちてこほりそめたり　名取正代子

よへよりの寒さしられて今朝はしも
野もりのかゝみこほりろめけり　大海原芳子

ちりつもる紅葉はそこにみゐなから
むすひろめたるいけのうすらひ　住山幾子

夜あらしにちりし紅葉もそのまゝに
うすこほりせりにはのいけみつ　甲斐莊僊子

冬ふかみさむけき夜半のきたかせに
にはのいけみつこほりそめけり

木からしの音にさむさやゆつるらん
のどかにねむろにはのやりみづ　井上はな子

こからしの風ふきすさむさむけさに
かけ樋のみつはこほりろめけり　保坂いま子

ふゆあさき谷の小かはもうすらひに
しはしもみちをさちにけるかな　勝部しう子

落ちゝりし楢のひろはをたよりにて
けさはこほりのむすひそめけり　津田鐐子

あしかもの夢さわくなりうきねする
いけのあし間や先つこほりけん　齊羽茂枝子

ちりうかふ木の葉の卅のうこかぬは
かはのこゝろもこほりそめけん　大橋てい子

あさりするかもめの陸にさわくなり
いけのこほりやむすひそむらん　花山保江子

こからしの風のおさのみきこゐけり
たにまのなかれこほりそむらん　花山操子

谷かはにちりしこのはのなかれぬは
けさのこほりのさちしなりけり　花山乙子

たゝならぬ夜半の寒さをつけかほに
しみつもけさはこほりそめけり　財田すゑ子

うつみひのもさも寒けききのふけふ
にはのいけみつこほりそめけり　大堀愔子

いははしろ清水のおさもけさたゐて
木の葉なからにこほりそめけり　土肥仙子

これをたに友さたのみしやまみつの　三浦時子

おとさへたゝてけさはこほれる

みつの面に浮ひしおち葉そのまゝに
にしき織りたるいけのうすらひ　島田悦子

そら寒くあらしすさみていけみつに
今朝見えそむるうすこほりかな　梅崎初子

朝かせにもみちはうけていけみつの
うこかぬ見れはうすらひにけり　小山いは子

ふくかせを松にゆつりていけみつの
けさめつらしくうすらひにけり　高橋みつ子

瀧つせのおとのかすかになりぬるは
なかるゝみつの今朝こほるらむ　曾田秀子

今朝見れは流れもやらすほそがはの
あさ瀬にむすふうすこほりかな　會田嘉美子

朝なゆふなあさる堀江のこほれるは
ふゆこもりするはしめなるらむ　會田千代子

いはそゝくたるひの水のやまかせに
あらそひかねてこほりそめたり　内田ひこ子

わがやどのかけひの水もおとたえぬ
夜半のさむさにこほりそめけん　淺井信子

みそき川きりてながるゝあさの葉の
おもかけうかふけさのうすらひ　大岩水子

たに川におちしもみちのながれぬは
けさしもみつのこほりそめけん　西周まさ子

十二月五日　兼題　靜の前の事を記す

長野縣長野町　太田貞子

天

見るとてもうれしくもなしますかゝみ
こひしき人のかけをとめねは

生きとし生ける人の世のわかれ何れ悲しからぬはなけれどかき數ふ三つの別れなんすぐれて悲しかりけるそが中にも今一きはなるは妹脊のわかれにこそあめれ靜は白拍子に妙にみめかたちうるはしくあまつさへ敷島の道にいたりふかゝりけれど時のほまれいとたかく世のおぼえもこよなかりけり一夜判官義經に見えしより日ましに厚し心になりまさり行きつ遂に只ならぬ中とぞなりぬる義經西國にいさをを立てやがて都のぼりせしを兄賴朝のいかりにふれてこゝに世を忍ぶ身とはなりけり雲にさすらひ水に從ふ身にもさすがに靜が名殘の惜まれて吉野へも伴なひにしが人目はゞかりて遂に都へと返らしむ世は春としいへど遠山里はまだみ雪いと深く細谷川の流れも氷りにむせびてさそふあらしも身に如何ばかりなりけんあはれ戀しき人の影をとゞめねばますみの鏡もいとくもりがちけんかし思へば心盡しの形見もなか〱に思ひ出草の種ところなりつらめ靜吉野の奥にわかれしより峯の白雪の積もる心はつゆ

とくるときなく折〳〵は清瀧川の音にも立てつ藏王のれ前にありきのおとの戀しきを忍び鶴が岡の廣前にをだ卷のいとくり返し昔を今に引き返すべき術もやとたえぬ嘆きをかなでぬあはれ思ひの深き只一筋の道より外の道ゆかぬ心の中ぞふみわけてといひけん峯のしら雪のいさぎよきにもくらべつべきさるほどに世はます〳〵あさましく變りゆきて鎌倉山の山風みちのくの果て迄もふきめぐり戀しき人のおとゞぶらはんよすがもなく忍が岡の忍びてのみも過ぎにしが日にけに沈みがちにもなりゆきて遂に十あまり九がへりの春のれも影を阿伽井の水にうつし初めぬよな〳〵れとづる〻松の響のみ獨りゐる心なぐさめ岩根つたふ水の音のみ清き心の友にはありけんとあはれもよはさる〻をやがてそのあくるとしはかなくなりぬとか遠きむかしの物がたりきゝれよぶからに今も尙袖の上の露うられもげになん

一筋の道より外のあだしみち
ゆかぬや清き心なるらん

地

大坂市北區相生町百六十二番邸　梶井　久子

賎のをだまき繰り返しつゝ思ひ續くれどいとなづかしき人の操にこそあなれ身は磯の師禪が娘とて舞ひめなれど賎しからぬにしもあらざれど一たび其身のゆるしてより遂に其道を失はざりしはやんごとなきあたりにもをさをさ得難き事なりかしそも六條堀川の第に土佐坊昌俊がありさまを見て彼れ必やこよひ夜討のしたくみあらんと告げたりしは義經の侍女としてまことに恥しからずよく其機を見きといふべきなり判官ひとのさかしらにおひて袂を難波の浪にぬらし心を吉野の雪に碎くまでもなほかたはらを去らず仕へたれどたとひ何處の果までもと思ひしならめどいかにせん落人の女つれたるは世の聞ゑもいかがとの人の詞をさてこそ忍ぶべからぬ難を忍びたつべからぬ情をたちて涙の袖を分ちしなれこれ其時を知れどなるべしあゝ其折の心やいかにあたりに積る雪よりもまづ消ゑ入りなん思ひなりけんかしまた厚き惠に賜りし物どもは太かた供人に奪ひ去られたつきなき身ひとつを知らぬ山路にふり捨てられてとかうさまよふうち此山の法師に欺かれわりなく都につれられたりここにも人はいとつらくて由を賴朝に告げしかど急ぎ鎌倉にめされて雪踏み分し人の行衛をいづらいづらと問はるるだにあるを身さへただならざりけれどわりなくそこにひきとめられたりあゝ其月ごろの心のうちやいかなりけん別れし折の白雪は露

となり雨となり幾度袖を濡らしたりけんさるをしらず顔にも其舞見たや歌きかむやと强ふる人なんいとつらきやされど鶴が岡の大前に涙の袖をひるがへしたれど中々人にはれもねらでありし昔を慕ひうまずたゆまぬ操を示したるは貴きに屈せぬ心あれど成るべしまた梶原のなめげをとがめて君なほここにいまさむといひし一言には六尺のますらをも爲に恥しかりけんかしかゝる涙の月日を重ねて遂に玉のをのこを生みたりしも根をたち枝を枯らす諺にもれず夫さへ潮風荒き由比が濱邊に捨てられたりしかは歎はいよいよ身にれひ積りてたえもはてなんばかりの命をまたも都にはなちかへされしとか斯くあるうちにも身を離さざりしは別れし折に賜はりし人の鏡なりけりこを折々取り出では昔を忍ぶ種となしつある時もとりいでて「見るたびにいとゞ涙のますかがみ戀しき人の影をとめねば」とうたひしとか實にさもありなんかしあはれ靜は賤しき白拍子にあらずやさるを當時勢並ぶものなき頼朝すらなほ意の如くなす能はざりしとはかよわき女の心なれどもよく動かす所のなければなるべし

人　　出雲國飯石郡三刀屋町　奥原とも子

吉野山峯の白雪ふみ分けて
入りにし人の跡ぞ戀しき

あゝこの歌を詠みて誰か袂を絞らざるものあらむ

しづやしづ賤の小田卷くりかへし
昔を今になすよしもかな

誰かこを聞きて靜の心中をかなしまざるものあらむ靜の前はもと京都の白拍子にごり江に身を沈めたる賤女なりされど容貌秀麗にして心さへいと淸くありしたに齊人に侍し夕べに楚人と語るべき身を以て一たび九郎判官に見ゆかたみに思ふ緣しの絲を結びしより終身ろの操を破らず判官の都を落つるや從ひて吉野の深雪を踏みしだき鎌倉に捕はれてなほ判官のありかを告げず賴朝のたゞ前にあるをも憚らず舞歌にことよせて判官を慕ふの意をあらはし凜然として松柏の操を示し鬼をもとりひしぐといふ關東武士をして袖を絞らしめやがて送られて京都に歸るや天龍寺のふもとに草の庵を結び緑りに匂ふ黑髮をうちおろして煩惱の迷を絶ち行を眞如の月にすまして判官の冥福を祈るに餘念なかりきとかやあはれ靜の如きみめよき女は或は求むることを得むされど靜の如き貞操完美泥中の蓮ともいふべき女は今いづくにか求むべきあゝ貞女の鑑として千歳ののちなほ之を稱揚するまことにゆゑなきにはあらざ

るなり

佐々有鄰子

靜の前は義經のおもひものにてその貞烈はみよし野のよしのゝ花よりもうるはしく鶴か岡の松の操たゝしき美夫人なり 源の末の流のきよからぬ鎌倉山のよはの嵐を身にひきうけて立舞ふ袖のかなりは千 代萬代の末かけて由井か濱邊の浪よりたかく陸奥の衣川みなそこ きよく女鑑のまさやかに仰きてもしたひても今の現の姫とれたちの心の 眞柱ふとくたくましくつき立て此の靜の前の十九歳の姿にならひたまへ 心を學ひたまへあはれ靜の前の姿うるはしく心をたしく千年に 八千歳に八百萬歳に

田津木久子

「よしの山みねの白雪ふみ分けて」とうたひしにて夫の 爲には死をもおそれさりしま心はあらはれぬ時はこれみたれにみたれたる 世とてをゝしき事のみこのめる女多かる中に優にやさしくしてをれす屈せぬ 勇氣をそなへよき女の道をつくしゝはこの靜御前にこそされは 義經もいたく愛して落行にもあまたつかへし女の中にて靜 をのみともなひしはことわりなりかし吉野より都にかへれとさとされし折もはや死を 覺悟せしなり君か手にかゝりて死なはやとまて願ひしかとも遂に 義つれの意にしたかひ泪なから山を下りけれとも夫を思ふせつなる心の 何につけてもあらはるゝに義つれの妾靜なる事をしられ鎌倉 へおくられしとさへあるに舞の上手なる聞え高かりけれはあたともおもふ賴 ともの前にて舞仕れと命せられし時の心やいかにいかて忍はるゝへき病 といひてゆかす義經に心まかせし身なれは其ゆるしをうけれはとい なひし時ははやいのちをなき物ときはめやりしなりされとも許 されすして舞し時賴朝の威をもおそれす義經を戀したふせつなるま心をあらはし後都にかへりて世にいてす志をたてゝ義つれにそむかさりしはなみ〳〵の女のなし得さるところかゝる女をこそ女の中の女といふへけれ

眞鍋直子

昨日の味方も今日の敵となるあさましき戰國の世によく外柔和溫順にして内不屈の氣節をそなへ婦德をまつたくし後の世の女のかゝみとなりしはこの靜の前なりけり靜は源義經の妾にしてもとは白拍子なりされとかゝるいやしききはには似ていと貞にして賢なりしは其行にてしられぬかの土佐房昌俊のおそひし時心を盡して義經を諫めたる草木もなひく賴朝のあたりをもおそれすあたとし惡まるゝよしつれを戀したひてうたひしなと實に死をきはめて義經をこひしたふま心をあらはしたるはよく貞淑にして不屈の勇をそなへたるものならすしてはいかてかゝるへき遂に身を終るまて操をまもりて志をへんせさりしはよく婦道を心得し貞女にこそ

名取正代子

靜は磯禪師の女にして都の白拍子なり源義經其技の 堪能なると容色のうるはしきとをめてゝ妾となしぬ一とせ義經讒者の 讒によりてゆくりなくも兄賴朝の疑を蒙り都を去て遂に吉野山にかへる 靜はいつこまてもとつきそひまつりしを義經これをさとして黃金寶物なとあまた與へて人をして都へおくりかへさしめんとす靜きゝて妾は君の 御爲なれは火にも水にもいとひはせし命は棄よりさゝけまつりて是まてしたかひまつりしをいかなれは今更かゝることのたまふそ君の 御意ともおほはすとて泣き伏しぬされとかくては却て君の御爲 ならすとねもころにいはれけれは心ならすも人に送られ都にかへらんとする途中送り來 るもののともその黃金なとに目をくらみてこをうはひ去りぬ靜今はか ちなき

捨小舟よろへもなくて深雪の中にたゆたひ居りしを山僧に捕へられて都に送られやかて鎌倉に届出されぬ頼朝直に義經の所在を問ふに固く知らすと答ふ一日頼朝の妻政子静の舞を見んことを思ひ鶴岡の八幡宮に於て舞はしむ静は幾度かいなみしかとも強ひていはるゝまゝに泣く〳〵も立てまふ先つ君か代をうたひさて次に「よしの山峯のしら雪ふみわけていりにし人のあとそこひしき」とうたふ頼朝こをきゝて叛人をしたふは奇怪千萬なりと大に憤るを政子とゝめて君か流人におはせし時の妾か心いかにおほす今静の夫を慕ふは實に理ならすやいかてゆるさせ給へとくりかへすに頼朝もこそとうなつきぬ此時の静か心いかなりけんあはれ大物の浦波かしこかりしも吉野の風雪はげしかりしも忍びにしのひしを朝夕かしづく夫には生別れ剰へ送り來りし侍どもには捨はなたれあはれ死なんとは幾たびか思ひしならん今このうたひ出し時もすでに死を決せし時なり豈あはれの無極ならずやがて政子も静か心の中を思ひやりて物などあまたかづけて都へおくりかへさしむ静は母と共に都にかへり天龍寺のほとりに草の庵をむすび佛の道に心をよせてひたすら夫の冥福をいのりしとそあはれ白拍子などいへば其品こそいやしけれされど静がごときはおのが身のあやふきをもかへりみずひたすら夫を思ふ貞操又武士に屈せぬ雄々しさ實に貞烈兩ながら全き婦人とこそいふべけれ

保坂いま子

見るとてもうれしくもなしますかゞみこひしき人のかけをとめれは」よしの山みねのしら雪ふみわけていりにし人の跡そこひしき」しつやしつ賤のをたまきくりかへし昔を今になすよしもかな」あはれこの歌をよみて涙をこぼさゞるものあるか

源の義經のその兄頼朝となかあしくなりて吉野の山に落ゆく折静の前の従ひたりしを都へかへすとてかたみにとかゞみを與へしをかきいだきつつなきさけぶ事かぎりなかりきとぞいかにその別れのつらかりしかいかに行末のおもひやられて悲しかりしかはしめのうたはこの別れの折よみつるなりその後鶴か岡八幡宮に召し出されて頼朝の前にて舞をする時高らかにうたひしといふ歌は其つぎのなりをはりの歌も同じ折うたひしなりこひしたふ心根のあはれと思ひやるだにかなし凡そ別るゝ時のことは誰しの人もつらかりなんされども日うつり年ふるまゝにかなしとなげきあはれとかこちし事もいつのまにか高ねの白雪の春になるまゝにきゆるがごとくうすらぎはてては打わすれおもひもいでぬが世のなみ〳〵の人のことなりあはれ静の前の頼朝の前をもはゞからずうたひ出けんはなか〳〵に昔時めきし折を思ひいでよしのゝ山に分入にし人の志のはれてたへがたきものありしなるべし身は白拍子のいやしきもこゝろばへのいとたしかなるたぐひまれなりとやいはまし後にはこの世をゆめのうき世なりとはかなみおもひて髪をおろし尼となりて義經の跡を弔ひたりとなんあはれ鶴か岡のまひの袖は長き年月を經し今も目のさきに見ゆるこゝちして高らかにうたひたりといふ歌は今猶耳の底にとほりてきく人毎に見る人毎に誰かはあはれとおもひかなしとおもはざるべき

高橋満子

賤や賤しつのをたまきくりかへし昔をこひし静の前はもとは賤しき白拍子にてありしかいとみさを正しきものにて安德天皇の壽永三年と云ふ年に義經の妾とはなりぬこれより夫妻の間互に情愛ふかくて静ふかく義經の身の上を思ひはかれは義經も亦つねに静を具してけりされは義經か兄頼朝と中あしくてみちのおくにおもむく折なとは其別れやいかに悲しかりつらむ別れの殊に悲しきは夫妻の別れなりけりとあ

とにて歌ひ出しを見ても思ひやらるるかくてもなほ峯の白雪ふみわけて吉の山入りにしあとを慕ひつゝ鎌倉の時めく花をよそにみて賴朝の前をもはゝからす義經をこふる思ひを明ししなと心のほとこそ世にためしなき女子なれほとなく身を墨の衣にやつしてあくる年の秋のくれ木々の落葉の積る思ひを胸につゝみて此世になき人とはなりにけり

梅崎はつ子

靜の前はもと京の舞妓なりき源義經兄賴朝をたすけて再ひ源家を興しゝ其かみ妾とはなれり折しも兄弟の中は或者の爲めに破られ義經は鎌倉にも居兼ね京に上りて堀川の舘に住みしなりされば靜は常に心を盡してかしづけりある日賴朝土佐坊をして其堀川の館を攻めしむる由仄かに聞ねけれは靜小者をしてさぐらしむるにまさしくてかくれもなければかくと義經につくさるにさわく氣色もなきに靜は獨り心をいためにけれと詮方もなければ今はとてひそかに物の具どもの用意をそなしけるとて進拙なくて舘は攻め破られ主從僅かに逃れて吉野山へと分け入りぬ時に靜は伴はれにきもとより忍ふ旅にしあれは女故に人目にたたんも心うしとて本意なくも義經にわかれてびそかに都路をたどりけりされどいつしか人に見あらはされて鎌倉へ送られたりたゝ義經の身にかゝるうたかひのとくるすへもやとなにくれと賴みけんに思ひもよらす賴朝よりの舞ひの所望いくたびかいなみしに其甲斐もなくして鶴が岡にて昔の手振をあらはせり恥を忍ひし其心根そあはれなるそれさへあるに反逆の義經を慕ふとてすてにつみせらるへかりしを賴朝の夫人政子のためにゆるされぬ後に尼となり義經主從の冥福を祈り行ひをすましゝとなん實に智勇勝れたる人なから薄命に世を終りしはいたはしきかきりならすや

島擣衣　　諏訪晴子

よる波のおとにまきれすきこゆなり
　はなれをしまにころもうつこゑ

折菊

やま里のまかきなさけるしらきくの
　はなをたをりていへつとにせん

曉千鳥　　河野文子

あかつきのねさめさむけきうら風に
　むれたつちよりこゑさわくなり

女鑑の目なるを祝侍て　　小町谷里江子

おりいたす人のこゝろのあやにしき
　これそをみなのかゝみなりける

炭竈煙　　川田孝子

小しほ山ゆきけのくもとみゆつるは
　しつかすみやくけふりなりけり

夕雪　　仝

ねくらとふからすの外はこゑもなし
　やましつかなるゆきのゆふくれ

　　仝

庭くさのしけみもいつかしもかれて
　なりにふれたる
　もすかれとむきあさほらけかな

冬松　　島田好子

打ちわたすのなかに立るひさつまつ
　ゆきつもれともいろはかはらす

名所雪　　成田延子

よしのやま花のさかりとみるまてに
　ゆきふりつもるあさほらけかな

人の身を立て名を成す事を得ざる所以の源因は、種々あるべしと雖も、大方は、其の志を徹する事能はざるにあり。始は、學若し成らずむ死すとも歸らじと、志を立てヽ、勉强すれども、中途にして、其の志を變じ、始の目的を捨てヽ、他の事を行はんとす。其の事又思ふ儘に行はれざる時は、又他に轉ず。是に於いて、終身一事業をもなす事能はずして死に至る。而して其の志を變ずる源因は、忍耐の心なきと、酒色に耽るとにあり。若し人間と生れたる甲斐には、禽獸と等しく終らざらんと欲せむ、是を愼まずして可ならんや。男にもあれ、女にもあれ、小事にても、大事にても、其の始に立てし精神は、決して動かす事なく、一意專心、之を行ひて必徹底すべき事なり。

大國隆正

立てそめし志だにたゆまずば龍のあぎとの玉もとるべし

一首の意は、如何なる人にても、立て始めし時の志をたゆます事のなからむには、如何なる事もなしえぬ事はなし。龍は人力にて、捕ふる事は思ひもよらぬ事なれども、誠心一到、之を捕へて、其の腮にある名玉を取らむと欲し、堅忍不拔たゆ

む事なくど、必其の名玉をも取り得べしとなり。

凡世の中の事、何事かなしがたからむ。之を成さんと欲せど、成らぬ事はなけれども、之を成さんと欲せざる故に、成らざるなり。否成さんと欲すとも、成るまでに成さゞる故に成らざるなり。苟も心を一にし、思を専にして、龍の腮にある名玉だに取らんと欲する時は、遂には取る事も得るものなれど、其の他の事得て知るべきなり。故に事の成ると成らざるとは、始に立てし誠心を貫くと貫かざるとにあるなり。事のよきと惡しきとにはあらず。世には、此の事は能くすれども、彼の事は我は能くせずなど云ふ人もあれど、大なる誤なり。ゆめ此の歌を忘るべからず。

平田篤胤

雲となりあるは雨ともふりしきて神代の道に身をやつくさむ

一首の意は、雲の天を覆ふが如く、或は、雨の至らぬ隈なく降りしくがごとく、天下に心を配り、東西南北に奔走して、四方の隅々隈々まで、骨を粉にし身を砕きて、神代の道、即神代より我が國に傳はり來れる皇道の爲に、身をつくし力を盡

すべしとなり。

我が國には、我が國の道、神代より傳はれることは、已に前に云へるが如し。其の道の盛なると衰ふるとは、我が國の消長に關することとなれば、我が國民たるものは、益之を發揚して、國家を盛大ならしむることに盡力せざるべからず。古來の歷史を見るに、藤原氏跋扈の時代は、即斯の道の衰へし始にて、源平の爭鬪、鎌倉の幕府に至りて益甚しく、後醍醐天皇の朝、漸く之を挽回せんとして、復足利の時代となり、戰國の世に至りては、實に衰頽の極點に達せり。德川氏となりて、少しく快復に趣きしも、未其の功を奏せざりしに、明治維新となりては、大に盛運を極むるに至れり。然れども、西洋各國と交際する弊は、再衰運を招く基となり。日を逐ひ月に從ひて、其の非なるを見る。豈慨嘆の至ならずや。我が家を盛にするには、我が家法を盛にせざるべからず。我が國を盛にせんと欲せば、宜しく我が固有の大道を盛にすべきなり。大道衰へ國風廢れたらんには、如何に碎身粉骨すとも、何の詮かあらむ。國民たるもの、宜しく再思熟考すべき所なり。

成尋法師母、

もろこしも天の下にぞあるときくてる日の本をわすれざらなむ

一首の意は、此の世界の外の國に行くならば、我が日本の國を忘るゝ事もあるべけれども、支那の國も、此の我が戴ける同じ天の下にありと聞けり。されば假令其の支那の國に行きたりとも、天日の照る光に漏るゝ事はあるまじければ、其の天に照る日の出づる本の我が國を、決して忘るゝ事なかれとなり。

凡、其の國家に生れて、其の國家を愛するは、當然の理なり。若、其の國家を愛せざらんには、國家は人の爲に押領せられて、印度の如く、布哇の如き慘狀に陷り。人民は、外人の奴隷となりて、生命財產を全うする事能はざるのみならず、少しの幸福をも、受くること能はざるに至りぬべし。然るに、輓近西洋に心醉せる徒、利慾の爲に瞑眩せる輩、動もすれば我が國を愛せずして、彼に賣らむとするものあり。或は機密を竊に彼に報じ、或は名を借して土地を彼に賣るなど、實に長大嘆息すべき事少なからず。此の如きは、實に我が國の蠹にして、肉を食ひても猶足らざる奸邪なり。如何に自分獨利益を得て富貴になるも、國家の中に生々する人民なれば、其の國家なければ、己も亦身を置く所なきに至る事明なり。國

家ありてこそ、國民は幸福を受くる事を得るなれ、國家なければ、其の得たる利益も富貴も、我が物にはあらざるに至る。是を思はずして、目前の利欲に迷ひ、國家の大計を忘るゝが如きは、愚も亦甚しきにあらずや。天の下に國は多かれど、我が日の本の如き國はなきぞかし。我が國の土地に孕まれ、我が國の粟を食むものは、云ふも更なり。遠く海外に渡り、異境に住むものと雖も、決して一日も我が日の本を忘るべからざるなり。

本居宣長

敷島の大和心を人とはゞ朝日にゝほふ山ざくらばな

一首の意は、我が日本の國に住める人民の、古より持ち傳へたる世界に殊有の心は、如何なる心ぞと人の問ひしならんには、彼の朝日うらゝかにさし登りたる時に、麗々としてにほへる山櫻の花を以て答へむ。大和心は恰も其の花の如きものぞとなり。

我が國の人心の、古より優美高尚にして、恰も彼の櫻花の朝日に匂へるが如きは、世界各國、何處の浦を求めても決してあるべからざるものなり。君として臣を憐

み、臣として、君に忠をつくし、親は子を愛し、子は孝に親に仕へ、兄弟相睦くして、夫婦相和き、長幼禮を正しくして、朋友信を重んじ、義理を辨へ、廉耻を知り、風俗純白にして、習慣敦厚なり。恰も春の花のにほひのどけく、秋の紅葉の照りかゞやけるが如し。是即大和心の外にあらはれたるものにして、君子國の稱ある所以なり。然るに、近頃西洋の風俗習慣、次第に浸漸して、大和心を失はしめ、君子國の稱を奪ひ去らんとする勢あり。若、此の大和心を失はんか、我か國は我が國たる事を得ざるに至るべし。大和民族たるもの、宜しく此に注意して、各其の心をして、朝日に匂ふ山櫻花の如くならむ事を期すべきなり。

八田知矩

幾そたびかきにごしても澄みかへる水や御國のすがたなるらむ

一首の意は、清き水は、幾たびかき濁しても、亦もとの清水となる。是もとより水の姿の清淨潔白なるものなれど、時々亂臣逆賊ども出で、天下を騷擾ならしむる事はあれども、暫時して又元の清淨潔白なる御代となる。恰もかきにごしたる水の、再澄みかへるが如し。されど此の澄みかへる水が、即我が國の國體とい

ふきものならんとなり。

我が國は、君臣の義、彜倫の道、確乎として、國初の時に立ち、天地のあらむ限は、變ることなき國體なり。故に　天皇陛下は、萬世の君にして、人民は萬世の臣なり。彼の外國などの如く、上下位を異にし、貴賤處を易ふるが如きことは決してなし、然れども時に汚隆あり、世に盛衰ありて、或は臣として君を凌ぎ、下として上を蔑にせし事なきにしもあらず。彼の蘇我馬子及蝦夷父子の如き、藤原氏の如き、平清盛源頼朝の如き、或は北條義時父子及高時の如き、足利尊氏兄弟の如き、或は權威を恣にし、或は　天皇に敵し奉り、甚しきに至りては、遠島にさへ遷し奉りし事もありき。然れども、自　天位に望をかけ、　神器を奪ひ奉らむとするものは、決してあらざりしなり。是はさすがに、我が國の體に於いて、然らざるを得ざる所以なればなり。而して其の逆賊の後は、久しく繼續せず、長くして十五代に過ぎずして、又もとの　天皇の御代に歸す。是幾ろたびか濁しても、又元の清水に澄みかへる所以なり。苟も我が國に孕まれて、　天皇陛下の御恩澤に沐浴する臣民たるものは、必我が國體の萬國に勝れたる所以を知り、忠君

愛國の念をます〳〵盛にせざるべからざるなり。

聖武天皇

ますらをの行くとふ道ぞおほろかに思ひて行くなますらをの友

行くとふとは、行くといふ道ぞと宣へるなり○おほろかにとは、俗に並大抵、或はよい加減にといふに同じ○一首の意は、此の度、我が國の全權を託して、外國に遣はすことは、實に大丈夫の行くべき道にして、且名譽ある使なり。汝等は、此の命を奉じて、外國に行き、決して使命を辱しめて歸る事なかれ。汝等の處置の如何によりては、國の威名ともなり、又耻辱ともなる、決しておほろかに思ひて行くべからず、確乎不拔なる誠心を固めて行くべきぞと宣へるなり。

一國の全權を帶びて、外國に使するものは、確乎不拔なる誠心を持たざるべからず。一國の威風は、之によりて耀き、之によりて衰ふるものなれば、其の責任實に重しと云ふべし。故に　聖武天皇も、殊更に此くは仰せ給へるなるべし。而して、此は啻に外國に使するものゝ守るべき御歌なるのみにあらず。臣民たるものゝ必守らざるべからざる御歌なり。すべて臣民たるものゝ、我が國を辭して、遠

國光

國體の尊嚴を保し國權の伸張を力め公平を持し、政黨を嫌ひ獨立を倘び、權勢を謝し苟も國家の爲にあらずんば敢て一筆を着ることなし

毎號八十頁、七萬餘字盡く是れ憂國の血涙に非ざるはなし世の虚名を厭ひ實行を貴び君國の憂を以て己が憂となす者國光を讀まずして何を讀まむ

定價一冊金十錢●十二冊(半ケ年分)一圓十錢●廿四冊(一ケ年分)二圓●郵税一冊一錢●毎月十日廿五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號一九四六）國光社

細川十洲翁序　三輪田眞佐子著

女子の本分　全

●定價金二十[illegible]●[illegible]

三版

近者、我邦女子道徳の頽敗に赴くこと、日又た一日より甚し。三輪田刀自、之に慨する處あり。本邦固有の道徳に基きて、此の書を著し、以て我が邦の婦女子に、其の本分のある處を示さんことを期せらる。本社の一たび、之を世に公にするや、忽にして、再版を賣盡し今や三版の成るを告ぐ。請ふ。續々御注文あらんことを。

目錄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
（電話一九四六）

女鑑第九十八號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十八年十二月四日印刷
同　年十二月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所（電話番號一九四六）　國光社